

日本写真家協会会報

NO.186
(2026.Sep.)

- 第 19 回 JPS フォトフォーラム
- 第 51 回 2026JPS 展入賞作品紹介
- JPS2026 年新入会員展「私の仕事」
- 2026 年「JPS アワード」決まる

JPS

日本写真家協会会報 186 号		目次	2026 年 9 月
■ Forum	第 19 回 JPS フォトフォーラム		2
	「地球の声を聴く ―動物写真にできること」		
	講演・パネルディスカッション＝柏倉陽介、篠田岬輝、 山田耕熙（パネリスト）、高砂淳二（司会進行）		
■ Exhibition	第 51 回 2026JPS 展入賞作品紹介		8
■ Exhibition	2026JPS 展報告・第 52 回 2027JPS 展案内		12
■ Congratulashons	2026 年 JPS アワード 第 52 回「日本写真家協会賞」おめでとうございます		
	受賞者：全日本写真連盟		15
■ Topics	賛助会員トピックス		16
■ Telescope	あれから 70 年、「ザ・ファミリー・オブ・マン」写真展 ふたたび		
	「本物の写真に触れる」	 松本徳彦	19
■ New Face Gallery	JPS2026 年新入会員展「私の仕事」		20
■ Books	JPS ブックレビュー		24
■ General Meeting	2026（令和 8）年度第 27 回定時会員総会報告		27
■ Message	Message Board		28
■ Award	第 1 回「JPS 写真家賞」受賞者決定！！		29
	2026 年第 1 回「JPS ノンフィクション写真賞」決定！		30
■ Information	追悼＝名誉会員・都筑 弘雄、BAKU 斉藤、		34
	正会員・小島 卓、吉野俊幸、井上寿美雄、植松秀之、渡辺達生、 鈴木邦弘、前田憲男、高井 潔／編集後記		35

『日本写真家協会会報』は第 185 号（2026 年 3 月発行）を以って印刷物としての発行を終了し、第 186 号（2026 年 9 月発行）から JPS ホームページでの PDF データ発信といたします。また、今までの年 2 回印刷・発行から年 4 回（6 月・9 月・12 月・3 月）の編集・発信に変更いたします。なお、次号会報 187 号は 2026 年 12 月 28 日の発信予定です。

第19回 JPS フォトフォーラム

(2026年3月20日(金・祝): 東京都写真美術館 1階ホール)

主催: 公益社団法人 日本写真家協会

今回のテーマ:

「地球の声を聴く ―動物写真にできること―」

開催にあたって

2007年から始まったJPSフォトフォーラムは、今回で第19回の開催となります。他のイベントでは実現しにくい、様々な分野の写真家が集って一つのテーマを語りあうフォトフォーラムは、多種多様な写真家を会員に抱えるJPSならではのイベントになっています。

今年のテーマは「地球の声を聴く―動物写真にできること―」です。

今回登壇いただくのは自然・動物写真家の柏倉陽介氏、篠田岬輝氏、山田耕熙氏の3名です。柏倉陽介氏はオランウータン孤児をテーマとしたドキュメンタリーのアプローチで。篠田岬輝氏は人間と自然・動物との関係性に焦点を当て、害獣や狩猟をテーマに。そして山田耕熙氏は「人と野生動物たち、一緒に未来へ」をテーマにとそれぞれの目線、アプローチで動物たちと向き合っています。そんな個性あふれる写真家の熱い思いに触れて頂ければと思います。

パネルディスカッションではネイチャーフォトの第一人者、高砂淳二氏を迎え、クロストークを開催します。

公益社団法人 日本写真家協会 会長 熊切大輔



講演: 「開発という名の津波」 柏倉陽介

「大自然の前では、人間などちっぽけな存在だ」
そんな言葉を耳にするたび、私はいつも立ち止まってしまう。本当にそうだろうか。

かつてボルネオ島は、広大で豊かな熱帯雨林に覆われていた。ところが1970年代以降、森林伐採や農園開発が急速に進み、今なお野生生物たちの生息地は失われ続けている。現地に立てば、その変化を否応なく突きつけられる。かつて森があったはずの場所に熱帯雨林の面影はなく、アブラヤシ農園が地の果てまで続いていた。その背景にあるのは、人間社会の大量消費という現実だ。



地上を覆い尽くすアブラヤシ農園。よく見ると、規則正しく植えられたアブラヤシが整然と立ち並んでいる。この異常な光景が大量消費を支えている。

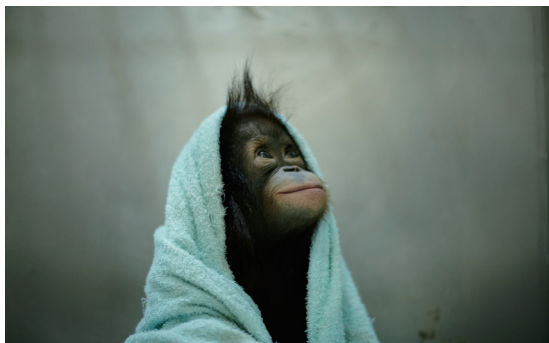
撮影: 柏倉陽介

森林破壊の大きな要因のひとつが、パーム油産業の拡大である。パーム油は、食料品やお菓子、化粧品、洗剤など、私たちの身のまわりのあらゆる製品に使われ、今や生活に欠かせない存在となっている。世界で生産されるパーム油の約85%は、ボルネオ島を有するマレーシアとインドネシアで生産されている。赤道直下の高温多湿な環境に適したアブラヤシを栽培するため、大規模なプランテーションが次々と造成されてきた。1973年から2015年までの約40年間で、ボルネオ島では約168,500km²もの熱帯雨林が失われたという(日本の面積は約378,000km²)。

この森林減少は遠い国の出来事ではない。私たちの日常と密接につながるパーム油の大量消費がその引き金となっている。そして、その罅寄せの先にいたのが親を失ったオ



森の奥にタオルに隠れたオランウータンを見つけた。野生と文明の狭間で行き場をなくした孤児はこれからもさらに増えるだろう。撮影: 柏倉陽介



保護施設の檻舎では頭からタオルを被ったオランウータンの孤児がいた。本当なら母親の体にしがみつき、その温もりに包まれている年齢だ。

撮影：柏倉陽介

ランウータンの孤児たちだった。

ボルネオ島サバ州にあるセピロク・オランウータン・リハビリテーションセンターでは、森林伐採や農園開発によって親と引き離された孤児たちが保護され、野生に戻るための訓練を受けている。本来、オランウータンの子どもは、母親の身体にしがみつきながら、何を食べ、どう生きるのかを、約10年もの歳月をかけて学ぶ。しかし母親を失っ

た彼らは、その術を知ることができない。そこで人間が母親の代わりとなり、長い時間をかけて自然へ帰る準備を支えている。けれど、たとえ野生で生きる力を身につけたとしても、生き延びられる場所の多くはもはや残されていない。私たちが何気なく手を取る商品の背後には、こうした命の問題が静かに横たわっている。

人間は、本当にちっぽけな存在なのだろうか。撮影を重ねるほどに、私の疑問は膨れあがる。人間は、隕石の衝突にも匹敵するほどのインパクトをこの星に与えているのではないか。これほどの破壊力を持った生物を私はほかに知らない。

柏倉陽介（かしわくら・ようすけ）

1978年、山形県生まれ。オランウータン孤児をテーマとして、写真集『Back to the Wild 森を失ったオランウータン』を上梓。ナショナルジオグラフィック国際フォトコンテスト、ワイルドライフフォトグラファー・オブザイヤーなどに入賞し、スミソニアン自然史博物館、国連気候変動枠組条約締約国会議などで作品を展示。「Endless」と題した環境撮影プロジェクトを進めている。北海道文教大学客員教授。



講演：「自然を見つめ、命を見つめる」 篠田岬輝

僕は、自然や命の気配から遠い場所で生きている。

日々口にする食べ物が、どこで、どのように生まれたのかを知らずに暮らしている。自分のスマホを作るために、何が起きているのかを知らずに暮らしている。死の気配は巧妙に隠され、自然や命は見えない場所へ押しやられている。

初めてケニアを訪れたときのことを、今でもはっきり覚えている。若いオスのチーターが、トムソングゼルの子どもを仕留めきれないまま、夢中で食らいついていた。ガゼルは高い声で鳴き続け、腹部からは鮮血が流れている。僕はただ立ち尽くし、その光景を見ていた。それは、初めて目の前で見える「命のやり取り」だった。

映像や知識として知っていたはずの出来事が、逃げ場のない現実としてそこにあった。そのとき、自分が生きてきた日常の風景が、急に薄く、作られたもののように感じら

れた。

それをきっかけに、僕は本気で動物と向き合うようになった。

-50℃にもなる北極圏、風速20mを超える南極圏、土埃舞う赤道直下のサバンナ、突然のスコールに襲われる熱帯雨林。最初は、動物が自然の中で生きている姿を見られるだけで満足だった。しかし撮影を重ねるうちに、さらなる違和感が積み重なっていった。僕が“自然”だと信じてきたフィールドと、そこに暮らす動物たちは、例外なく人間の影響を受けていた。

例年よりも1か月近く早い春の訪れに、まだ冬毛のホッキョクギツネは隠れる場所を失っている。狩猟のために金網に囲われた場所で、“野生”のシロサイがたたずんでいる。人間によって大幅に数を減らしたケープペンギンは、回復の兆しを見せないまま、消えつつある。皮肉なことに、僕



炭鉱の前でできたボタ山。早すぎた春は雪を溶かし、石炭がむき出しになった地面を、まだ冬毛のホッキョクギツネが歩いていく。

撮影：篠田岬輝



密猟防止のためにツノを切り取られ、金網の前で立ち尽くすシロサイ。このまま撃ち殺されるか、保護区へ売られていくかは、オーナーのさじ加減一つで決まる。

撮影：篠田岬輝

の目から遠ざけられてきた自然や命は、驚くほど人間の影響を受けていた。

動物と向き合いながら、考えるようになった。写真で、いったい何ができるのだろうか。

フィールドで撮影していても、その場で状況が変わることではない。問題はあまりにも大きく、複雑だ。それでも、目の前で起きている現実を見なかったことはできない。

「どうしたらいいと思うか」と聞かれ



保護されたビーチに上陸するケープペンギン。かつては人間によって数を減らし、いまは人間によって保護される。

撮影：篠田岬輝

ることがある。僕の中に明確な答えはない。

ただ、写真を通して、その一頭の物語を知ってもらうことはできる。そして、見る人の中に問いを残すことはできると、僕は信じている。この子は、なぜそこにいるのか。なぜ、この状況が生まれているのか。

その問いが、誰かの思考を静かに動かし、次の一步につながることを願っている。

篠田岬輝 (しのだ・こうき)

1990年、東京都生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、米国会計系コンサルティング会社に就職。都市での生活の中で、死の気配が隠されていることに違和感を覚え、2017年に独立し作品制作を開始。赤道から極地まで、自然の中に身を置きながら、そこにある「命」と向き合う撮影を続けている。近年は人間と自然・動物との関係性に焦点を当て、害獣や狩猟をテーマにしたプロジェクトにも取り組む。パリ国際写真賞 (The Prix de la Photographie, Paris) Nature 部門 金賞受賞。JPS 会員。



講演：「自分と繋がる遠くの世界」 山田耕熙

インド・ランタンボールで野生の虎と彼らを取り巻く“今”を撮影している。

撮影当初、虎その物の姿を追っていた断片的な日々は、やがて彼らの生涯という“命のうつろい”を見つめ、自らの姿を重ねていくものになった。気付けば10年近くが経ち、4世代に亘る物語を追っている。

長い時間をジャングルで過ごしてきた。虎に出会えず、ひたすら静寂の中に身を置く時間は、虎の気配を感じて蠢く生き物たちの、命の駆け引きに五感を研ぎ澄ます時間となり、そのことは私に、一つの存在がジャングル全体と共鳴し合っていること、自然の中に境がなく全てが有機的に繋がっていることを気付かせてくれた。

やがてその体感にはコロナ禍を機に、『人間の世界』と『動物の世界』という、まるで別々に存在し得るかのようには語られる物事の“間”を見つめる視点へと拡がり、そこにある隔たりではなく、繋がりを見出すことに意識が向き始めた。いつしか虎の生涯を追いつつも、同時に撮る対象はワイルドライフ自体が存続していくための構造や環境、最終



“親子”という関係は2年程で終わり、その後はテリトリーを争うライバルとなる。その限りある関係性は“別れまでの時間”が持つ意味を考えさせる。

撮影：山田耕熙

的には地元の人々の暮らしにまで及ぶようになった。

言うなれば、野生動物の姿を追う中で、人の存在を無視して現代のワイルドライフを語ることはできないと考えるようになり“人間が自然の一部であること”を強く意識するようになったのだ。

ここに示す2枚の写真、

一見するとそれぞれが全く関わりのない世界を生きる者に映るだろう。

しかし事実はその真逆であり、両者の暮らしは密接に関わり合っている。

老人は狩猟を生業としてきた民族であり、その行為は半世紀近く前に突如“違法”となった。捕まると知りながらも、家族と生きるために“密猟”を繰り返した男はやがて捕まり、家族に会えない日々を送った。

一虎を殺すことではなく、守ることで自分の家族を養う—

自然と野生動物を保全する現地 NGO に出会い、協力することで密猟以外に家族を養っていく術が得られることを知った男は、今では自身の子供、孫、更に下の世代の者た



狩猟民族 Mogya の老人。NGO との出会いで改心した男は、密猟者として怯えて生きる日々が、家族で暮らせる時間に感謝する日々となったことを話してくれた。

撮影：山田耕熙

ちに対し、自分と同じ道を歩ませないために必要な教育、生活支援を受けさせることが出来るようになった。そして、そういった NGO の地道な活動を支える根幹こそが、野生の虎が生きるジャングルに訪れるツーリズムからの経済効果であり、地域社会を保全活動に巻き込むことで地元の人々の意識までを向上させている。

関わりのない世界のように映る2つの存在は、自然保全と地域社会を両立させる“構造”に視点を向けることで“互いを必要とする存在”として繋がり始めるのだ。

Why save the tiger ?

では私たちと遠くかけ離れたように見える世界と私たちの暮らしはどうリンクするのか？

物事の見方によって価値観を変えられるとすれば、離れた世界を繋ぎ止めて伝えることが写真の役割だと思っている。

“大切な存在に対する果てしなく深い愛”

それは2つの写真に共通する想いだ。

彼らの姿に自らを重ね、その声を聞いて欲しい。

山田耕熙（やまだ・こうき）

1979年、神奈川県生まれ。自然ドキュメンタリー番組に衝撃を受けたことをきっかけに、自分の目で世界を確かめるべく旅をはじめた。これまでに、南極、北極、アラスカ、アフリカ、ガラパゴス諸島などで様々な生き物たちを撮影。“人と野生動物たち、一緒に未来へ”をテーマに、近年はインド・ランタンボール国立公園に生息する野生の虎の姿を撮影し続けている。第8回日経ナショナルジオグラフィック写真賞ネイチャー部門最優秀賞受賞。JPS会員。



パネルディスカッション司会進行：「不思議な動物 “人間” にできること」 高砂淳二

40年ほど前、海の中を撮るカメラマンとして僕の仕事は始まった。生まれたのは宮城県・石巻のはずれにある港町で、物心ついたときから海が好きだった。やがて一生いろんな海を潜って周れたら幸せだろうな、と思うようになりそんな道を目指すことにした。

実家の周りには、カキ屋、ホヤ屋、ウニ屋、水産加工場などが多く、水産高校が目の前にあった。さらに近くには鮎川という捕鯨基地もあり、海のもの＝食べるもの、という図式が脳内に成り立っていた。

ダイビング雑誌のカメラマンになり、海外のいろんな海に潜るようになると、それまで食べ物として接してきた、マグロやホヤ、イワシ、そしてクジラまでもが撮影の対象になった。カメラを通して見た途端、かれらを見る目が変わった。“同じ地球に暮らすもの同士”のような、そんな見え方になったのだ。

やがて水中だけでなく自然全体を撮るようになり、地球全体の繋がりを肌で感じるようになった。そして、人間を含む動物はみな、ほかの生物を食べることでしか生きていけないのだ、という宿命を実感し、命を無駄にしたくない、

とか、感謝して食べよう、ということを中心から思うようになった。

本能のまま食べて生きること、秩序維持に繋がるほかの生物たちと違い、僕ら人間は、相手が絶滅してしまうまで捕ってしまったり、「開発」によって生息地を奪い絶滅に追いやってしまったりもする動物である。そんな自分たち自身を、地球のガンだ、という人もいるけれど、一方で動物保護に人生を捧げている人もいるし、植物をこよなく愛する人も少なくない。また、僕は雄大な風景や動物の仔などを見たりすると、神々しさや愛情を感じたりもする。人間はただのガンなどではないのかもしれないし、そう思いたくもある。人間は本当に不思議な動物である。

このたび有難いことに、世界の動物たちといろんな形で向き合ってこられた、柏倉さん、篠田さん、山田さんのお三方と、お話をさせていただく機会をいただいた。僕ら人間とほかの動物との関係を、それぞれの立場からどのように見ていращやるか、また、同業者どうし、動物写真家に何ができるのかをお話しできるのは、僕にとってとても嬉しく、光栄なことである。得体の知れない生き物であるわれわれ“人間”の正体が、チラッと垣間見れるのではなからうか。

高砂淳二（たかさご・じゅんじ）

1962年、宮城県生まれ。熱帯から極地まで世界中の国々を訪れ、海中、生き物、虹、風景、星空など、地球そのものをフィールドに、自然の繋がり、水や生命の循環、人と自然の関わり合いなどをテーマに撮影活動を行っている。著書は30冊を超え、国内外で写真展多数開催。TBS「情熱大陸」をはじめ、メディアや講演会などで、自然の大切さ、自然と人間の関係性、人間の地球上での役割などを幅広く伝え続けている。海の環境 NPO 法人 OWS 理事。JPS 会員。



漁師が魚をあげたのがきっかけで、イルカたちが浅瀬まで来るようになった。今も管理の下、餌付けが行われている。オーストラリア
撮影：高砂淳二

【協賛】OM デジタルソリューションズ株式会社、キャノンマーケティングジャパン株式会社、株式会社シグマ、ソニーマーケティング株式会社、株式会社タムロン、株式会社ニコンイメージングジャパン、富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

第19回 JPS フォトフォーラム 開催報告

第19回 JPS フォトフォーラムは、3名の自然・動物写真家を招き、「地球の声を聴く—動物写真にできること」をテーマに開催した。登壇したのは、ボルネオ島の森林破壊とオランウータン保護の現場取材する柏倉陽介氏、保護と狩猟の両面から北極圏・南極圏やアフリカ諸国取材する篠田岬輝会員、インド・ランタンボールでベンガルタイガーとそれを取り巻く地域コミュニティ取材する山田耕熙氏である。いずれも被写体としての動物だけでなく、その背景にある環境破壊、保全、地域社会との関係まで視野に入れて活動しており、近年の自然写真が単なる鑑賞対象にとどまらず、社会や環境へのまなざしを伴うものへ広がっていることを示す顔ぶれとなった。パネルディスカッションの司会は、ネイチャーフォトグラファーであり環境保護団体の理事も務める高砂淳二会員が担当した。

最初に登壇した篠田会員は、自身が最初から動物写真家だったわけではなく、都市生活の中で「死」や「命」が見えなくなっていることへの違和感から野生動物の世界へ入っていった経緯を語った。アフリカで、チーターがガゼルの子を捕食する場面に遭遇し、自分が日々口にする食べ物の背景にある命をほとんど意識せずに暮らしていたことに気づいたという。

その後、ライオンの群れを8年間追いつけるなかで、個体識別ができるほど深く向き合う一方、自然と思っていた場所が、観光や開発、人間の生活によって大きく変化している現実も見えてきたと語る。ケニアでは観光が動物を保護対象に変える一方で、オーバーツーリズムが生息域を圧迫している。さらにグリーンランドの氷河後退を例に、気候変動のスケールの大きさにも触れた。そのうえで、写真を通じて現状を伝える3つの方向として「保護」「狩猟」「個体を追う物語」を提示した。「保護」では、ケープペンギンの保護施設やリカオンのGPS調査を通じて、動物が置かれている状況や保護の現場の努力を見せる。「狩猟」では、グリーンランドの狩猟文化を単なる残酷さではなく、食文化や生活の背景も含めて捉える。そして「個体を追う物語」では、ホッキョクグツネの換毛と気候変動の関係のように、一頭の個体の姿から大きな環境変化を感じさせた。写真は美しいだけでは足りず、その背後にある現実をともに届けてこそ、見る人の理解を深められるという主張が講演を貫いていた。

2番目に講演した山田氏は、インド・ランタンボールで野生のトラを撮影してきた経験を軸に、人と野生動物の共存を考えさせる講演を行った。単に強く美しいトラを見せるのではなく、そのトラが生きる土地で、人々がどのように暮らし、どのような利害や葛藤を抱えているのかに目を



篠田岬輝会員



向けていた点が印象的である。かつてはマハラジャに狩られ、のちには地元住民との摩擦から密猟の対象となったトラが、いまは保護へ向かう流れのなかにあることを示し、その歴史を写真で描き出していた。

講演では、密猟者だったラカンさんと家族の話も紹介された。家族を養うため密猟に関わっていた彼が、保護団体の支援を受け、トラを守ることで暮らしを立てる道へと変わっていったというエピソードから、保護とは単に動物を守るだけではなく、その土地の人々の暮らしを理解し、別の未来を示すことでもあると伝えていた。そして観光による経済効果が保全を支え、地域に利益が還元される仕組みがあつて初めて、理想論ではない共存が成立するという視点も示された。さらに、野生動物を守ることは、人間が未来に生きていくための基盤を守ることでもあると述べ、「彼らと生きる美しい未来を残す」という思いで撮り続けていると語った。

柏倉氏の講演は、ボルネオ島で15年近くにわたって取り組んできた「Back to the Wild」という、オランウータン孤児をめぐるプロジェクトを中心に展開された。世界有数の熱帯雨林を持つボルネオで、その森が失われつつある現実を示し、そのなかで親を失ったオランウータンを撮り続けてきた経緯が語られた。

冒頭で紹介されたオランウータンやボルネオゾウの親子の写真は、どれも穏やかで生き生きとした表情に満ちていたが、その後、話は急速に森林破壊の現実へと移る。アブラヤシ栽培の拡大によって熱帯雨林が失われていく様子を、「人間が起こした津波が熱帯雨林を根こそぎ破壊してしまったようだ」と表現した言葉は強い印象を残した。

さらに、保護施設で暮らすオランウータンの孤児たちの姿を通じて、彼らがなぜ孤児になったのか、再び野生へ返すまでにどれだけ長い時間と手間が必要なのか語られた。タオルを被った孤児や人間にしがみついた孤児の姿は非常に愛らしいが、その感情移入こそが、彼らの故郷が何かに起きているのかを考える入り口になる。柏倉氏が語った「感



山田耕熙会員



柏倉陽介氏

情が伝わる写真を撮ろうとしている」という言葉は、愛らしさの先にある現実を見せ、見る人が何か行動を起こしたくなるような写真の力を示していた。可愛さを入りにしながら、その背後にある人間の営みと環境の変化へ視線を導く構成は、自然写真とドキュメンタリーの両方の強さを感じさせた。

高砂会員が司会を務めたパネルディスカッションでは、「人間という動物をどう見るか」「無力感を感じたことはあるか」「動物との距離をどう考えるか」「動物写真にできることは何か」といった様々なテーマが語られた。高砂会員は冒頭で、「かつては動物を見せるだけでよかったが、いまはその動物が置かれている状況まで含めて伝えなければ未来がない」と述べ、そうした問題に積極的に向き合う写真家が日本でも現れてきたことに希望を示した。



高砂淳二会員

動物との距離感について山田氏は、撮影ではドライバーやガイドがいるため、自分だけで距離を決められるわけではなく、現場の熱量を調整することも撮影者の仕事だと語った。篠田会員からは、ドローンと野生動物の関係にも話が及び、機材の進歩によって新しい表現の可能性が広がる一方、動物への影響をどう考えるかという問題も共有された。

また無力感について柏倉氏は、自然写真家は現実を撮ることはできても、その場で変えることはできず、職業上の無力感を感じると率直に述べた。一方で、高砂会員自身も海鳥の体内に詰まったプラスチックの問題などをきっかけに保護活動へ関わっていることに触れ、写真家がどこまで現実に関与していくのかという実践的な問いも共有された。

そして最後に「動物写真にできることは？」というテーマでは、柏倉氏は「写真は言葉が不要で、すべてを伝えることができる」という写真の直感的な伝達力を、山田氏は「動物を見ることで感じられるものを未来に伝えていく」という未来に向けた力を、篠田会員は「動物が直面していることを関心のない人に向けて伝えていく」という決意をそれぞれが語り、議論は締めくくられた。写真は見る人の感情や認識を動かし、行動のきっかけをつくることができるといふ認識が、登壇者全員に共有されていたように感じられた。

アンケート集計では、「大変良かった」86%、「良かった」14%と極めて好評であった。例年とは全く異なり、来場者は女性が52%とやや多く、50代以下が47%を占めるなど若い層の参加が目立った。また、プロ写真家は9%、アマチュア・写真愛好家が64%、鑑賞中心の来場者が27%で、これまでとは異なる層に訴求できたことがうかがえる。

アンケートの感想には「動物写真で深いメッセージを伝えることができる、伝えなければならないことを学んだ。一見すると綺麗なホッキョクグツネの写真に、温暖化の恐怖が含まれていることが象徴的だったし、トラが遺跡に住みついている写真が未来の世界だと受け止めた人は鋭いと感じた。また、オランウータンの子どもの愛らしい表情は、



その背景を理解すると恐ろしく見える。動物写真家の作品に含まれるメッセージをもっと多くの人に伝えなければならないと思い、今回学んだことをさっそく知人に伝えた」3名の講演は、大変興味深く、単なる写真解説だけではなく、写真を通じ社会へ訴える力があつた。地球環境、動物、人間に関連した同じ世界であると気付かず、別々に考えて過ごしている人類に、警告を与えてくれるほどインパクトがあり、また詳細な面では眼からウロコの話も多く、私自身も、日常生活にも「足るを知る」で過ごしていこうと、改めて思い、節約・儉約に心掛けようと思った」といった、講師たちが伝えなかったメッセージが伝わっている様子が見られた。また「協賛企業のタイアップやPRの要素がなく、純粋に写真や社会についてのお話になっていたのがとても好感を持ちました」といった、初めてフォトフォーラムに参加した方からの、取り組み自体への高評価も見られた。

今回のフォトフォーラムで特徴的だったのは、3名の講演がそれぞれ異なる地域と被写体を扱いながら、最終的に議論が「人間と野生の関係をどう見つめ直すか」という一点に収斂していったことにある。保護、狩猟、共存、森林破壊、観光、地域社会。切り口は違っても、動物写真はもはや動物だけを切り取るものではなく、その周囲にある世界ごとと写し取る営みであることが、3つの講演を通じて明確になった。だからこそ、後半のパネルディスカッションでは個別の事例紹介にとどまらず、写真家の倫理や役割、受け手に何を残せるのかという、より根源的な問いへ展開していったのだと思う。来場者や会場の反応からも、今回のテーマ設定が広い層に届いたことが分かる。写真を見て終わるのではなく、見たあとに自分の暮らしや選択を振り返らせるところに、今回の講演の大きな意義があつた。

今後も「JPS フォトフォーラム」だからこそできる企画を継続していきたいと思う。なお、3名の講演とパネルディスカッションの詳細は本稿では紹介しきれないため、あわせてYouTube 配信も参照されたい。

(記／企画委員会委員・篠田輝博、撮影／桃井一至)

JPS 公式 YouTube チャンネル

「フォトフォーラムオンライン」など、動画コンテンツがご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=w2PUYglEJLY&t=137s>



第51回 2026JPS 展 入賞作品紹介

2026JPS 展開催によせて

公益社団法人 日本写真家協会
会長 熊切大輔

公益社団法人日本写真家協会（JPS）は、1950年に創立した、現在全国に約1,200名の会員を擁する、わが国を代表する職業写真家の団体です。写真家の地位の確立、著作権保護などを掲げ、写真文化の振興と啓発を目的として幅広い活動を行っております。

様々な活動を行うなかで、中心的な事業となるのがJPS展の開催です。当展は日本最大級の写真コンテストとして1976年から始まった歴史ある公募展です。そしてJPS展は昨年50回の節目を迎え、さらに発展を続けています。

私たちを取り巻く環境は日々移り変わります。現在、生成AIなど「画像」表現は目まぐるしく進化しています。しかしそれは「写真」ではないのです。撮影者がその現場にいて、思いを込めてシャッターを押す。あなたにしか撮れない、あなただから撮れた1枚が「本物」でありその価値があるのです。それぞれの個性あふれる作品表現、様々な被写体が結集したこのJPS展。展示を存分にお楽しみください。

写真展の開催にあたり、ご協賛いただいた皆様、審査員の方々、そして応募者の皆様に、心より御礼申し上げます。

総 評

前回は記念すべき節目でもある第50回を迎え、華々しくJPS展を開催することができました。そしていよいよ次のステップへという今回の第51回も、多くの素晴らしい作品をご応募いただきました。そんな応募作品は年々その表現、被写体も多様になりどのような作品が上位に上がるかわからない面白みが増しているように感じています。

写真コンテストに応募する時に、どんな作品が評価されるだろうと意識されることがあるかもしれませんが、その傾向や対策を考えるのも一つの楽しみかもしれませんが、それだけでよいのでしょうか。素晴らしい作品が多く応募される中で独自の光を放つ作品があ



審査員：左から、藤森邦晃（『フォトコン』編集長）、渋谷敦志、中野耕志、南佐和子、熊切大輔（審査員長）の各氏
撮影：藤田修平

ります。

それは「個性」という唯一無二の表現が写し出された作品です。テーマであり手法であり、オリジナリティあふれる作品からは撮影者からのメッセージや表現したいストーリーが伝わってきます。そんな自分にしか撮れない作品との出会いを審査員は楽しみにしています。

毎回、様々なジャンルや表現スタイルの写真家と写真表現に携わる方で審査をしています。それぞれの目線、評価は狭い型にはまることはありません。作品と対峙しそのメッセージや表現を読み解きながら作品の魅力を探っています。技術の高さはもちろん「あなたらしさ」を感じ、評価されたものが今回の受賞作品といっても良いでしょう。長くテーマを追い続けた熟練を感じる表現。若者らしいセンスと瞬発力で撮られた作品。JPS展ならではの世代を超えた表現の共演もまた楽しみの一つといえるでしょう。

後付された生成AIではありえない、一期一会という写真の本質。今回受賞された作品からそれを感じ取ることができるでしょう。1枚1枚が持つ作品の魅力とストーリーをじっくりと読み取って、楽しんで頂けることを私たちは望んでいます。

審査員長 熊切大輔

第51回 2026JPS 展 東京展

東京都写真美術館／2026年5月27日（水）～6月5日（金）
（B1F 展示室） 10:00～18:00

（木・金は20:00まで、月曜休館）

共 催／東京都写真美術館（公益財団法人東京都歴史文化財団）

後 援／文化庁、東京都

第51回 2026JPS 展 関西展

京都市美術館 別館 2F／2026年6月9日（火）～14日（日）
10:00～18:00

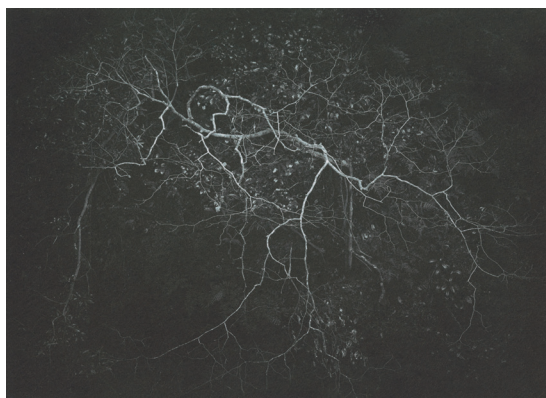
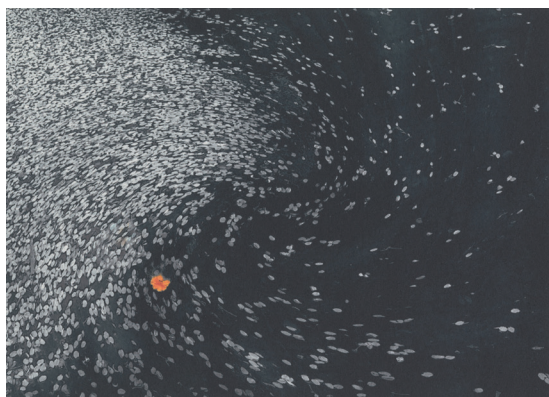
後 援／文化庁、京都府、京都府教育委員会、
京都市、京都市教育委員会

文部科学 大臣賞

賞状・盾・副賞
賞金 60 万円

丸山 禎子 (兵庫県)
「Last Performance」

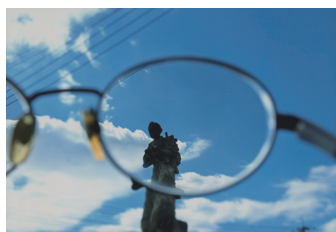
カラー 3 枚組



東京都 知事賞

賞状・盾・副賞
賞金 30 万円

塩野 いくお (栃木県)
「帰郷」 カラー 5 枚組



18 歳以下部門
最優秀賞

賞状・盾・副賞

小串 明璃 (和歌山県)
「継承」 カラー 4 枚組



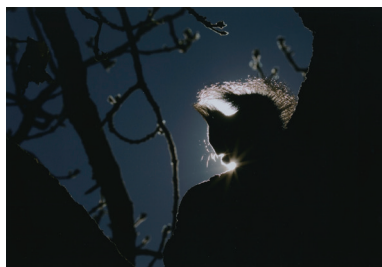
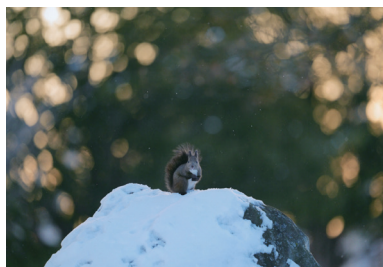
金賞

賞状・盾・副賞
賞金 10万円

西山 亜希子 (北海道)

「光のファンタジア」

カラー5枚組



銀賞

賞状・盾・副賞

中村 和貴 (福岡県)

「最果て」 カラー単写真



銀賞

フィルム賞

賞状・盾・副賞

飯島 進介

(東京都)

「深呼吸の必要」

モノクロ5枚組



銅賞

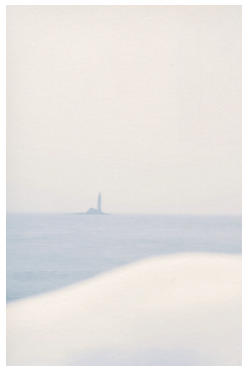
賞状・盾・副賞

小早川 友香

(東京都)

「余白」

カラー 3 枚組



銅賞

賞状・盾・副賞

中村 香織

(埼玉県)

「在る温度」

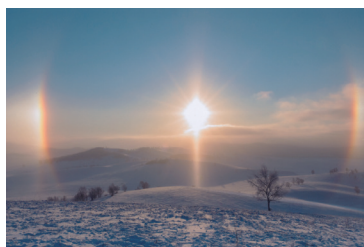
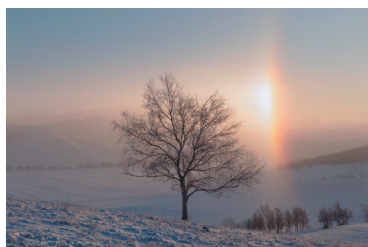
カラー 3 枚組

銅賞

賞状・盾・副賞

マンドリン エミ (千葉県)

「円弧が雪原を照らす」 カラー 3 枚組



【ヤングアイ部門】

日本写真家協会
会長賞

賞状・盾・副賞

日本大学 芸術学部 写真学科
「ふたりの記憶」

眞道 希歩・小野 遥香

ヤングアイ
奨励賞

賞状・盾・副賞

東京工芸大学 芸術学部 写真学科
「輪郭を描く、焼き付ける」

伊藤 彩良・中澤 生多・畑 文乃



第51回 2026JPS 展 報 告

担当理事 加藤恵美子

半世紀を越えて続いてきた JPS 展は、2026 年、東京展と関西展 2 会場での日程を終え、今年も多くの出会いと交流を生み出し、盛会のうちに閉幕した。

東京展は東京都写真美術館 B1F 展示室にて 2026 年 5 月 27 日（水）～6 月 5 日（金）の 9 日間、関西展は京都市美術館別館 2 階にて 6 月 9 日（火）から 14 日（日）の 6 日間で開催し、総入場者数は 4,838 名となった。

作品応募総数は 1,529 名 4,735 枚、内訳は一般部門が 1,393 名 4,404 枚、18 歳以下部門が 136 名 331 枚と昨年に比べて約 8% 減少した。JPS 展は応募料がかかることもあり、やや敷居が高いかもしれないが、歴史があり、JPS 主催の由緒正しい写真コンテストで受賞したいという思いを抱いてもらえるよう今後も広めていきたい。東京展会期中、台風の接近があり、入場者数が極端に少なかった日も生じたが、会期中の来場者やイベント参加者数からして多くの方が JPS 展を楽しみにし、また関心を持っている写真愛好家は増えていと感じられる。

今回の応募作品では、昨今のデジタルカメラの進化や画像の編集技術の向上に加えて、プリント用紙にもこだわった個性ある自由な表現力を伴う作品が増えてきた感じがした。またフィルム賞を意識した銀塩写真での応募も増えたように思う。

審査は熊切大輔会長（審査員長）、渋谷敦志、中野耕志、南佐和子の各会員と藤森邦晃（雑誌『フォトコン』編集長）の個性豊かな 5 名によって厳正に行われた。それぞれが専門性ある意見を出し合い、審査は長時間に及んだ。文部科学大臣賞は丸山禎子さんの「Last Performance」、東京都知事賞には塩野いくおさんの「帰郷」、18 歳以下部門最優秀賞には小串明璃さんの「継承」が選出された。

今年の表彰式は会期中日の 5 月 31 日（日）に東京都写真美術館 1F ホールで行い、今回も全国から参加された多くの受賞者たちで会場は埋まった。続いて行った審査員による受賞作品講評会では登壇した 5 名の審査員によって上位入賞作品が講評された。直接講評が聞けるとあってほぼ満員となり、限られた時間の中、選考の理由や会場にいた受賞者本人との対話が交わされ、参加者にとっては有意義な時間となったと



審査員による受賞作品講評会

撮影：飯田耕治



表彰式 5.31 東京都写真美術館 1F ホール 撮影：飯田耕治

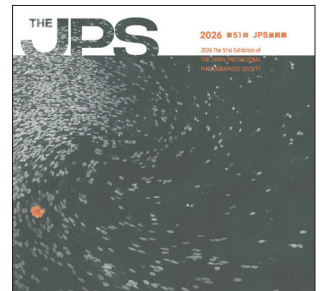
思う。その後は今年も恵比寿ガーデンカフェにて祝賀パーティーも開催し、ここでは受賞者、審査員、賛助会員各社、副賞提供社の方々と賑わい、華やかで多くの交流が生まれる場となった。

今回の展示枚数は受賞作品 397 枚と審査員特別展示が 4 枚、会員作品のパネル部門 20 枚はプリント展示、モニター部門 84 枚とヤングアイ 10 枚の作品は大型テレビでの展示となった。東京展では会員作品展示用の 4K 有機 EL テレビは昨年と同様、パナソニック（株）の協力で 3 台を使用することができ、パネル展示と合わせて特別感ある会員作品の展示スペースでは滞在時間をかけて見入る来場者が多かった。また昨年から展示した過去の図録の表紙や JPS の活動を紹介するパネルは今年も展示し、こちらも丁寧に見入る来場者が多く、JPS の文字モニュメントと共に好評な印象を受けた。

関西展は慌ただしく準備が行われ、東京展終了 4 日後から開催した。今回は実行委員で何度も話し合い、昨年とは違う壁面レイアウトに挑戦し、東京展と同様、関西展も好感ある感想が寄せられた。また 6 月 13 日（土）開催の受賞作品講評会、講演会も関西地域の受賞者や多くの参加者で埋まり、とても賑やかな会となった。関西展でも積極的に行われたギャラリートークは好評で、入場者数は昨年を上回る結果となった。

今年はここ数年とは異なるイレギュラーな日程に加え、2 会場同時進行で準備を進める必要もあり、対応は非常に困難であったが、写真展事業委員と関西展実行委員の尽力により、無事に開催できたことを何より嬉しく思う。

今回も本展の開催にあたりご協力いただいた多くの会員の皆さま、賛助会員各社、副賞提供社の皆さまに心より御礼申し上げます。



2026JPS 展図録



東京展会場

撮影：飯田耕治

第 51 回 2026 J P S 展の報告

公募受付：2025 年 11 月 10 日（月）～2026 年 1 月 13 日（火）

作品審査：1 月 29 日（木）

審査員：熊切大輔（審査員長）、渋谷敦志、中野耕志、南佐和子、藤森邦晃（『フォトコン』編集長）

後援：文化庁ほか

総展示数：515 枚（公募 216 枚 397 枚、会員作品 77 名 104 枚、ヤングアイ 10 校 10 枚、審査員作品 4 名 4 枚）

応募総数：1,529 名、4,735 枚（一般：1,393 名、4,404 枚
18 歳以下：136 名、331 枚）

入賞・入選者総数：216 名、397 枚

一般部門：175 名、311 枚（文部科学大臣賞 1 名、東京都知事賞 1 名、金賞 1 名、銀賞 2 名、銅賞 3 名、奨励賞 5 名、優秀賞 20 名、フィルム賞 1 名、入選 142 名）

18 歳以下部門：41 名、86 枚（最優秀賞 1 名、優秀賞 10 名、入選 30 名）

総入場者数：4,838 名

入賞者氏名

文部科学大臣賞	丸山禎子	Last Performance	3 枚組 カラー
東京都知事賞	塩野いくお	帰郷	5 枚組 カラー
金賞	西山亜希子	光のファンタジア	5 枚組 カラー
銀賞	中村和貴	最果て	単 カラー
銀賞・フィルム賞	飯島進介	深呼吸の必要	5 枚組モノクロ
銅賞	小早川友香	余白	3 枚組 カラー
銅賞	中村香織	在る温度	3 枚組 カラー
銅賞	マンダリンエミ	円弧が雪原を照らす	3 枚組 カラー (奨励賞以下略)

18 歳以下部門最優秀賞 小申明璃 継承 4 枚組 カラー
(18 歳以下部門 優秀賞以下略)

会員作品：77 名 104 枚

審査員作品：4 名 4 枚

企画展示「ヤングアイ」

公益社団法人日本写真家協会 会長賞：日本大学 芸術学部

写真学科「ふたりの記憶」 眞道 希歩・小野 遥香

ヤングアイ奨励賞：東京工芸大学 芸術学部 写真学科

「輪郭を描く、焼き付ける」 伊藤 彩良・中澤 生多・畑 文乃

ヤングアイ参加校：10 校

東京工芸大学 芸術学部 写真学科、現代写真研究所 総合科、日本大学 芸術学部 写真学科、日本写真芸術専門学校、専門学校名古屋ビジュアルアーツ・アカデミー写真学科、パンタンデザイン研究所 フォトグラフィ専攻、東京総合写真専門学校、日本写真映像専門学校、大阪芸術大学 芸術学部 写真学科、九州産業大学 芸術学部 写真・映像メディア学科

【東京展】

後援：文化庁、東京都

共催：東京都写真美術館

会場：東京都写真美術館 B1F 展示室

会期：5 月 27 日（水）～6 月 5 日（金）10:00～18:00
(木・金は 20:00 まで)、月曜休館

表彰式・講演会：5 月 31 日（日）東京都写真美術館 1F ホール 13:00～14:30 表彰式 参加者数／177 名、15:00～16:30 審査員による受賞作品講評会 講師／熊切大輔、渋谷敦志、中野耕志、南佐和子、藤森邦晃（『フォトコン』編集長）参加者数／182 名

祝賀パーティー：5 月 31 日（日）17:00～19:00 恵比寿ガーデンカフェ 参加者数／170 名

イベント：6 月 3 日（水）東京都写真美術館 1F スタジオ 13:30～16:30 「JPS 会員写真家による作品講評会&ギャラリートーク」講師／今井しのぶ、片岡和志、斎藤大地、清水哲朗、曽根原昇、内藤聡介、松井章、吉永陽一
台風接近のため中止

東京展入場者数：3,746 名

【関西展】

後援：文化庁、京都府、京都府教育委員会、京都市、京都市教育委員会

会場：京都市美術館別館 2F

会期：6 月 9 日（火）～6 月 14 日（日）10:00～18:00

講評会・講演会：6 月 13 日（土）kokoka 京都市国際交流会館 イベントホール 13:00～14:30 受賞作品講評会 講師／熊切大輔、加藤恵美子、柴田明蘭 参加者数／154 名、14:40～16:40 講演会「写真で巡る祇園祭—写真家田口葉子の視点から—」講師／田口葉子、中田 昭、大道雪代 参加者数／143 名

イベント：4 月 19 日（日）旧野田小学校 10:30～15:30 「はじめての一眼カメラ体験！／撮って・選んで・アルバム完成！」講師／クキモノリコ 参加者数／12 組 24 名
関西展入場者数：1,092 名

協力：キャノンマーケティングジャパン株式会社、パナソニック株式会社

副賞提供社数：49 社

第 51 回 2026 JPS 展

写真展事業委員会

担当理事：加藤恵美子 委員長：本間伸彦 副委員長：吉永陽一 委員：片岡和志、斎藤大地、曽根原昇、内藤聡介、松井章

関西展実行委員会

委員長：正木万博 副委員長：CAN(喜屋武圭介) 委員：越智信喜、金城泰哲、クキモノリコ



関西展会場

撮影：芳本忠士



関西展講演会

撮影：芳本忠士

第 52 回 2027 JPS 展案内

写真展事業委員会

JPS 展は 1976 年に始まった日本最大級の写真コンテストで、2027 年に 52 回を迎え、2 会場で展示を行う予定です。毎回数多くの作品が寄せられます。様々な被写体を個性的に表現した作品をお待ちしております。

下記のホームページにすべての応募規定・注意事項を掲載しています。応募に必要な記入用紙のダウンロードもできますので、熟読のうえ、ご応募ください。

https://www.jps.gr.jp/2027jpsten_oubo/



< 第 52 回 2027 JPS 展 応募規定 >

●テーマ

自由 ※注意事項をよくお読みください。

●応募資格

アマチュア、プロフェッショナル、年齢、性別、国籍を問いません。ただし JPS 会員は除きます。

●応募部門

一般部門：年齢を問いません。

18 歳以下部門：2008 年 4 月 1 日以降生まれの方。

●応募プリント

用紙サイズは A4 または六つ切 8 × 10 インチ (203 × 254mm) に限る。

カラー、モノクロ共プリントのみ (デジタル・銀塩を問いません)。デジタル加工も可。ただしデジタル加工・合成等の欄に印を入れること。加工・合成した作品も、必ず応募者本人が撮影したものであること。画像生成 AI を使用した作品は受付いたしません。入賞・入選者には素材データ・原板 (ネガ等) の提出を求めることがあります。

●出品点数

単写真=制限はありません。組写真=5 枚までを 1 組の限度として何組でもかまいません。組写真は、左より順に並ぶように構成して番号をつけてください。ただし、写真同士を貼り付けないこと。また台紙にも貼らないで応募してください。

●受付手数料

一般部門：1 枚につき 2,500 円 (組写真の場合も 1 枚 2,500 円)

18 歳以下部門：1 枚につき 800 円 (組写真の場合も 1 枚 800 円)

郵便局より下記、郵便振替口座へ 2027 年 1 月 12 日までにお振込みください。

お振込みがない場合は審査いたしません。

作品の中に受付手数料を同封することは、厳禁とします。

応募作品返却希望者は、返却料 2,500 円を加算してお振込みください。(応募作品の返却は 7 月下旬から 8 月上旬を予定しています。海外からの応募の場合は返却できません)

郵便振替 口座番号：00110-5-651936

口座名称 (漢字)：日本写真家協会 JPS 展

*通信欄に応募部門、応募合計枚数、応募者の郵便番号、住所、氏名、氏名フリガナ、電話番号を必ずご記入ください。

*氏名には必ずフリガナをふってください。

●受付及び締切

2026 年 11 月 10 日 (火) ~ 2027 年 1 月 12 日 (火) まで。

郵送または宅配便に限りです。直接持参されても受付いたしません。最終日消印有効。

●審査員

熊切大輔 (審査員長)、井上嘉代子、上田晃司、小澤太一、藤井利佳 (『GENIC』編集長) (予定)

●審査結果

3 月中旬頃、応募者全員に文書にて通知。また、ホームページ (<https://www.jps.gr.jp>) とメールマガジンでも発表します (電話でのお答えはいたしません)。

●展示用作品

入賞・入選作品は、後日指定する期日までに各自で指定サイズに引伸し、再提出していただきます。その際には作品の原板・データが必要になりますので、必ず保存しておいてください。文部科学大臣賞、知事賞 (仮称)、金・銀・銅賞作品については大型サイズになる場合があります。

●展示及びパネル製作費

入賞・入選作品は当協会特注パネルにて展示しますので、一般部門は 1 枚につき 12,000 円、18 歳以下部門は 1 枚につき 6,000 円を指定の期日までに納入していただきます。応募者の申し出による入賞・入選の辞退はできません。応募規定違反など何らかの事由により入賞・入選取り消しとなった場合には、違約金として 5,000 円を申し受けます。やむを得ない事情により展覧会が催行できない場合には、ホームページ上での展示及び公開とし、パネルは後日着払いの宅配便で返送します。製作費の返金はいたしません。ご了承のうえご応募ください。

●図録

第 52 回 2027 JPS 展図録の刊行を予定しています。図録の原稿には応募作品を使用します。

●賞

一般部門

文部科学大臣賞 1 名 (賞状・賞金 60 万円・副賞・図録)

知事賞 (仮称) 1 名 (賞状・賞金 30 万円・副賞・図録)

金賞 1 名 (賞状・賞金 10 万円・副賞・図録)

銀賞 2 名 (賞状・副賞・図録)

銅賞 3 名 (賞状・副賞・図録)

奨励賞 5 名 (賞状・副賞・図録)

優秀賞 20 名程度 (賞状・副賞・図録)

入選 150 名程度 (賞状・図録)

18 歳以下部門

最優秀賞 1 名 (賞状・副賞・図録)

優秀賞 10 名程度 (賞状・副賞・図録)

入選 30 名程度 (賞状・図録)

審査員特別賞 1 校 (賞状・副賞・図録)

※団体でまとめてご応募いただいた学校の中から選出します。

フィルム賞 1 名 (賞状・副賞)

※フィルムを使ったすべての受賞作品の中から選出します。

●展示会場・会期

東京都写真美術館 2027 年 5 月 29 日 ~ 6 月 6 日 (予定)

京都市美術館別館 2027 年 6 月 29 日 ~ 7 月 4 日 (予定)

※やむを得ない事情により展覧会が催行できない場合には、ホームページ上での展示及び公開に変更いたします。

●注意事項

1. 原則として未発表作品に限りです。商用利用 (販売・ストックフォト) された作品は応募できません。過去にコンテスト等で入賞・入選した作品及びそれらに類似した作品 (同じ対象を同じような条件で同じ時期に撮影した作品) は応募できません。また、現在コンテスト等に応募し結果が判明していない作品も応募できません。

2. 被写体の肖像権、著作権には十分にご注意ください。スナップ等で人物を撮影された場合には、コンテスト応募の承諾を得てください。

3. すべての応募作品の著作権は撮影者に帰属します。ただし、入賞・入選作品は巡回展終了までの間に当該作品を他に使用する場合、当協会の許諾を得てください。

4. 入賞・入選作品は、審査結果発表後、優先的に当展の広報宣伝等の目的範囲内で雑誌その他に使用することがあります。

5. 応募作品の返却を希望される方は、受付手数料納入の際、返却料 2,500 円 (枚数に関係なく) を加算してお振込みください。※海外からの応募の場合は返却不可となります。返却は 7 月下旬から 8 月上旬を予定しています。

6. 入賞・入選の展示作品は展覧会終了後、着払いの宅配便で返送します。

7. 作品受理以前の事故、破損につきましては、その責任を負いかねます。作品は慎重に取り扱いますが、輸送途中の不可抗力による事故等に対する責任は負いかねますのでご了承ください。

8. 受付手数料、パネル製作費はいかなる場合でも返金いたしません。

9. 応募者は応募規定、注意事項を全て了承したものとみなし、違反した場合には入賞・入選は取り消しとなり違約金として 5,000 円を申し受けます。応募作品到着後における応募、入賞・入選及び展示の辞退はできません。また、過去に規定違反のあった方の受付はお断りすることがあります。

10. 応募者の個人情報の利用は、今後の JPS に関する活動の範囲内とし、慎重に管理いたします。

11. 18 歳以下部門に応募された方が入賞・入選された場合は、年齢確認の資料を提出していただきます。

●氏名、住所、題名、フリガナ等は、わかりやすく楷書でお書きください。

●組写真の場合、作品目録の題名は、1 組につき 1 行で書いてください。写真の枚数分題名を書く必要はありません。

●作品目録は、必ず本人控用のコピーを保存しておいてください。

●応募票が不足する場合は、コピーし、また作品番号を修正してご使用ください。

●JPS 展の最新情報をお届けするメールマガジンを配信しております。

(<https://www.jps.gr.jp/jps-ten-magazine/>)

●応募後、住所変更等がある場合はお知らせください。

●応募に関するよくある質問 https://www.jps.gr.jp/jpsten_faq/

2026 年 JPS アワード 第 52 回「日本写真家協会賞」 おめでとうございます

日本写真家協会では、写真技術に関する発見、発明および写真文化の発展等について、著しい貢献もしくは寄与、功績のあった個人または団体に対して「日本写真家協会賞」を贈り顕彰しています。第 52 回「日本写真家協会賞」は、全日本写真連盟に贈ります。

表彰理由は「全日本写真連盟は、1926 年（大正 15 年）に創設された写真愛好家の団体で、朝日新聞社が後援する全国的な組織である。会員は全国で約 1 万人以上。国際写真サロン、全日本写真展、日本の自然写真コンテストなどの大規模写真コンテストや、各地域に根差した写真教室や撮影会を展開してきた。100 年という長きにわたり、全国の写真愛好家をつなぎ、我が国の写真文化に貢献してきたことに対して」。

全日本写真連盟（以下・全日写連）会長の渡辺雅隆さんにお話を伺いました。

—— このたびは受賞おめでとうございます。100 周年ということは、まさに日本の写真史とともに歩んでこれたわけですが、どのような経緯で設立されたのでしょうか。

渡辺：このたびはありがとうございます。全日写連は朝日新聞社の後援により設立されました。当時は新聞社の写真部員や地方支局員が今ほど潤沢ではなく、写真愛好家の力でそれを補おうと考えたのでしょう。アマチュアだけでなくプロや業者の方も入会され、記録を見ると著作権のセミナーも開かれていたようです。

—— それは驚きです。時代を先取りしていたんですね。コンテストや撮影会もその頃からでしょうか。

渡辺：そうです。1927 年に「国際写真大サロン」というコンテストを主催したり、「写真競技大会」と呼ばれる撮影会を開いていました。撮影会は 3 千人近い参加者を集め、賞金総額も 1 万円、現在の価値に換算すると 3 千万円近くと豪華でした。写真愛好家も増えて、他の新聞社の撮影会にも千人以上が集まっていたようです。

—— 写真が芸術として確立して、熱気があったんでしょうね。しかし第二次世界大戦で一旦歴史が途絶えました。

渡辺：まず新聞社がたいへんな苦境でした。印刷する紙はもちろん、フィルムや印画紙も配給制になり、記事の内容は政府にいわれるがまま。全日写連を含む 8 つの写真団体も「大日本写真報国会」に統合され、国策に沿った写真が推奨されました。

—— けれども終戦から立ち直るのも早かったですね。

渡辺：終戦直後の 1945 年、「朝日写真展」を開催しました。植田正治さんも参加されて、復活への希望の光となりました。そして 2 年後から再開され、現在に至ります。私も若い頃は支局の記者として、会員の方々が集まっている様子を「楽しそうだなあ」と眺めていました。会員数はピークを迎えたのはその少し後、2001 年で約 1 万 9 千人ですね。高齢化などもあってそこから若干減少はありますが、最近は若年層の会員も増えています。

—— コンテストには中高生の部もありますね。

渡辺：会員には写真部の顧問であったり、高文連（全国高等学校文化連盟全国写真専門部）に関わっておられる高校の先生もいらっしゃいます。その先生方が頑張ってください、感性が光る作品がたくさん集まっています。高校野球では過去の 100 年を踏まえ、これからの 100 年を考える「200 年構想」を打ち出しました。球児が未就学児や小・中学生に野球を教える

イベントを開くなど、裾野を広げる活動を行っています。また将棋界も、おじいちゃんが孫を連れていく趣向のイベントを開いています。我々もこれからの 100 年を見据え、子どもも含めた若年層を取り込んでいきたい。しかしそれは朝日新聞社や全日写連だけでは広がりません。JPSをはじめ、他社や他団体とも手を組んでいきたいと思っています。

—— ここ数年は AI が急速に発達し、写真はどうかという懸念もあります。そのあたりはどうお考えでしょうか。

渡辺：排除するのは難しいでしょう。しかし人間が写真を撮る想いや喜びは変わらないと思います。次の 100 年後も人間が生み出す写真や言葉は残るはずですよ。

—— 最後に、全日写連の機関誌として始まった『アサヒカメラ』のお話も。残念ながら 2020 年に休刊されましたが、2025 年 10 月に全日写連創立 100 周年記念号が発行されました。2026 年 7 月には創刊 100 周年記念号も発売されますが、さらなる復刊はあるのでしょうか。

渡辺：会の歴史から現状まで網羅した創立 100 周年号は我々のなかでたいへん盛り上がりしました。紙媒体の重量感や質感はやはりいいですよ。印刷や出版をとりまく環境は厳しく、復刊は容易ではありませんが、関心や機運が高まればまた企画が進む可能性はあると思います。

—— 全日写連の今後がますます楽しみです。本日はどうもありがとうございました。

第 52 回「日本写真家協会賞」 受賞者：全日本写真連盟



全日本写真連盟会長・渡辺雅隆氏
(写真左下)と役員の皆様

(2026 年 6 月 29 日 朝日新聞東京本社にて、
聞き手／専務理事・伏見行介、
撮影・構成／出版編集委員・鹿野貴司)

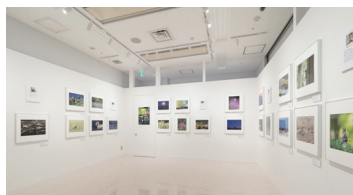
OM デジタル ソリューションズ

「OM SYSTEM GALLERY II 出展者募集」

OM SYSTEM GALLERY II は、写真と映像による新たな表現を発信する場として、2025 年 8 月に誕生しました。プロ写真家からアマチュア、新進の表現者まで幅広く開かれたギャラリーとして、作品を通じた交流や新たな出会いを育み、次世代を担う作家の発掘と写真文化の発展に貢献することを目指しています。

白を基調とした程よい広さの空間は多様な展示スタイルに対応しており、撮影機材メーカーを問わずご利用いただけます。個展はもちろん、グループ展などさまざまな形式の展示にご活用いただけます。

また、会期中には隣接する OM SYSTEM PLAZA イベントスペースにて、トークショーや関連イベントなどを開催すること



も可能です。現在、お申込みいただいた月から半年先までに開催される展示を対象に、出展申込みを随時受け付けております。皆さまからのご応募を心よりお待ちしております。

出展をご希望の方は、開催期に応じた締切日までに申込書へ必要事項をご記入のうえ、出展作品見本および作品解説を添えて事務局までお申し込みください。

【問い合わせ先】

OM SYSTEM GALLERY II 担当 榎本（えのもと） Tel：03-3466-2951 メールアドレス：gallery@om-digitalsolutions.com 営業時間：10:00～18:00（火曜・水曜定休）

キヤノンマーケティング ジャパン

EOS R6 V

— 写真家の表現領域を広げる一台

EOS R6 V は、静止画と動画のハイブリッドな撮影ニーズに応えるフルサイズミラーレスカメラです。約 3,250 万画素フルサイズ CMOS センサーと DIGIC X を搭載し、高画質と高速処理性能を両立。電子シャッター最高約 40 コマ/秒の高速連写や、人物・動物・乗り物を高精度に検出する被写体認識 AF により、報道、スポーツ、自然撮影など幅広い分野で高い機動力を発揮します。

動画機能では、センサー全域を使用する 7K オープンゲート記録に対応。1つの映像素材から横位置の映像だけでなく、SNS 向けの縦動画も高画質に切り出せるため、写真家・映像制作者の効率的なコンテンツ制作を支援します。さらに、4K120P のハイフレームレート撮影により、スポーツや野生動物など一瞬の動きを滑らかなスローモーション映像として表



現可能。Canon Log 2 / Log 3 による豊かな階調表現や、冷却ファン内蔵による長時間記録性能も備え、本格的な映像制作に対応します。

主な特長：

- ・約 3,250 万画素フルサイズ CMOS センサー
- ・人物・動物・乗り物対応の被写体認識 AF
- ・登録人物優先 AF
- ・ボディ内 5 軸手ブレ補正機構
- ・CFexpress Type B + SD カード デュアルスロット

【問い合わせ先】

キヤノンマーケティングジャパン株式会社 担当：佐野、西根
TEL：03-3542-1831

株式会社シグマ

かつてなく直感的な撮影体験を提供するフルサイズミラーレスカメラ Sigma BF

Sigma BF は、要素をシンプルに削ぎ落とし、撮影プロセスを自然な行為へと再構築した L マウントのフルサイズミラーレスカメラです。最大の特長は、カメラの歴史上初となるアルミニウム削り出しの真のユニボディ構造と、ミラーレス初のハプティク

ス（感圧式）を採用したわずか 3 つのボタンと 1 つのダイヤルという最小限の操作部です。主要な設定をライブビュー画面に、詳細設定をシステムメニューに格納した革新的な UI を搭載。設定中の項目はステータスモニターに表示されるため、クリアなライブビュー画面で構図や被写体だけに集中できます。性能面も妥協なく、約 2400 万画素



センサーや被写体認識対応の高速なハイブリッド AF、6K 動画、L-Log 撮影に対応。230GB の内蔵ストレージによりメディア不要で大量の RAW 記録が可能。パウダーブルーなど多彩な 13 種類のカラーモードも備えます。日常の美しさを捉え、撮影者と一体になる直感的な「撮る喜び」を呼び覚ます一台です。

【問い合わせ先】

株式会社シグマ 担当：桑山輝明
TEL：044-989-7436 メールアドレス：spsinfo@sigma-photo.co.jp
<https://www.sigma-global.com/>

ライカカメラジャパン

「ライカ SL3-P」登場

新製品「ライカ SL3-P」の核となるのが、新型センサーと新しいハイブリッドオートフォーカスシステムです。4400 万画素の解像度を持つ裏面照射型（BSI）フルサイズセンサーは、解像度と描写性能を両立し、高解像化しつつも最大 14 段の広いダイナミックレンジできわめて繊細な階調表現を実現します。3 種類のフォーカス技術を組み合わせ、素早く、正確かつ確実にピントを合わせる事が可能で、

フル AF 対応で最大 40 コマ/秒の高速連写機能、819 の AF ポイントにより優れたトラッキング性能、そしてインテリジェントな被写体認識によって動きの激しい被写体でも問題なく捉えることができます。マルチショットモードでは解像度を最大 1 億 7600 万画素にまで向上させ、ディテールまで忠実に再現する超高画素の画像を生



み出します。動画に関しては 8K までの撮影機能を搭載。最大 24 フレーム/秒で 8.1K/3:2 のオープンゲート動画撮影が可能です。また、HDMI を介した 8K オープンゲート RAW 出力や、8K 動画を 30 フレーム/秒で記録することもできます。加えて L マウントの採用によって L マウントアライアンスの幅広いレンズを使用することができ、写真・動画撮影における表現の自由度がこれまでに広く及びます。

【問い合わせ先】

ライカカスタマーケア 0570-055-844（ナビダイヤル）または、各ライカストアへ

ニコンイメージング ジャパン

NIKKOR Z 70-200mm f/2.8 VR S II
4 月新発売

NIKKOR Z 70-200mm f/2.8 VR S II は、従来モデルから約 26% の軽量化を達成し約 998g (三脚座リング・保護カバー除く) を実現した大口径 f/2.8 望遠ズームレンズです。AF は画像処理エンジン EXPEED 7 を搭載したカメラボディとの組み合わせで従来

比約 3.5 倍の高速化を達成、高い応答性で決定的瞬間を逃さず撮影可能です。スーパー ED レンズや ED 非球面レンズを新たに採用し、諸収差を効果的に抑え、軽量化と高い描写性を両立しています。全長も約 12mm 短縮し、



インターナルズームで安定した操作性と防塵・防滴性を確保。スポーツをはじめ、ポートレートや動画まで幅広い撮影ジャンルに対応する大口径ズームレンズです。

【問い合わせ先】

株式会社ニコンイメージングジャパン
https://nij.nikon.com/support/contact/internet.html
ニコンカスタマーサポートセンター
TEL:0570-02-8000

TOPPAN 株式会社

現代日本のパッケージ 2026

会期：2026 年 10 月 17 日 (土) ~
2027 年 1 月 17 日 (日)

会場：印刷博物館 P&P ギャラリー

共催：TOPPAN ホールディングス株

式会社 印刷博物館

一般社団法人 日本印刷産業連合会

公益社団法人 日本パッケージデザイン協会 (JPDA)

公益社団法人 日本包装技術協会

印刷博物館は毎年秋に「現代日本のパッケージ」展を開催しています。今年で 12 回目を迎える本展では、① 2026 日本パッケージングコンテスト入賞作品のうちのジャパンスター賞および技術賞の作品、② 2026 ジャパンパッケージングコンペティション受賞作品、③「パッケー



ジ and つながるデザイン」(仮称、日本パッケージデザイン協会) で選ばれた作品を展示しています。

消費者が直接手にする食品包装から、普段はあまり目にする事のない輸送包装まで、様々な種類のパッケージをご覧いただける機会です。みなさまのご来館をお待ちしております。

【問い合わせ先】

印刷博物館 東京都文京区水道 1 丁目 3 番 3 号 TOPPAN 小石川本社ビル
開館時間：10:00 ~ 18:00 休館日：毎週月曜日 TEL:03-5840-2300 (代表)
FAX:03-5840-1567
https://www.printing-museum.org/

ソニーマーケティング

αシリーズ最高の解像性能 フルサイズミラーレス一眼カメラ『α7R VI』

『α7R VI』は、新たに開発した有効約 6680 万画素フルサイズ積層型 Exmor RS CMOS イメージセンサーを搭載。加えて、AI プロセッシングユニットの性能を画像処理エンジン内に統合した BIONZ XR2 を新たに搭載しています。これらにより、読み出し速度が従来比約 5.6 倍に高速化し、ブラックアウトフリーでの AF/AE 追従の最高約 30 コマ/秒 (電子シャッター

使用時) の連続撮影を実現しています。また、「リアルタイム認識 AF+ (プラス)」や低ノイズかつ最大約 16 ストップ (静止画撮影時かつメカシャッター使用時) の広いダイナミックレンジでの撮影が可能。風景に加え、動きのある人物や野生動物などの被写体を精細に表現したいクリエイターのニーズに応えます。ソニー



では、プロフォトグラファー・ビデオグラファーの皆さまに会員制のサービス「ソニー・イメージング・プロ・サポート」を提供しています。銀座など全国 5 拠点に窓口を設け、機材購入や修理・清掃など、撮影活動をサポートいたします。

ソニー・イメージング・プロ・サポートへのご入会も随時受付しております。

【問い合わせ先】

ソニーマーケティング (株)
ソニー・イメージング・プロ・サポート担当
下村智文
Tel:080-1052-4624
Toshifumi.Shimomura@sony.com

フレームマン

フレームマンセレモニー開催のご報告と御礼

2026 年 3 月 11 日、大安吉日、東京プリンスホテル鳳凰の間にて「フレームマンセレモニー」を開催いたしました。ご多忙の中ご来場いただきました皆様に、心より御礼申し上げます。当日は奈須田会長、秋山社長、中澤専務がそれぞれ就任のご挨拶をさせていただきました。しかし、この会を開催した本当の理由は就任披露ではありません。就任のご報告だけでなく、お葉書でご報告をさせていただ

きます。会場には 1600×5000mm の FM プレート、短手 1500mm 幅のバライタ作品裏打ち、1500×4000mm のアルミ複合板作品、短手 2000mm 幅のフォトアクリル作品など、すべてフレームマンのオリジナル技術による大型作品を展示いたしました。私たちは長年、写真家の皆様の作品を支える裏方として歩んでまいりました。だからこそ、



一生に一度だけでも、世界を目指して共に挑戦してきたフレームマンファミリーに表舞台を用意しなかったのです。世界一になったから開催したのではない。世界一になれた感謝を伝えたくて開催した。このセレモニーは、その想いを形にした一日でした。これからは裏方としての誇りを胸に、写真文化の発展と写真家の皆様の作品づくりに貢献してまいります。改めて、ご来場いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

株式会社フレームマン
代表取締役会長 奈須田一志
東京都葛飾区東四つ木 1-16-19
電話番号 03-6657-6751 (代表)

ケンコー・トキナー

スリック アルカスイス互換グリップ 雲台「AF 1500 AC」登場！

株式会社ケンコー・トキナーは、スリックの新製品として、アルカスイス互換クイックシューを搭載したグリップ雲台「AF 1500 AC」の販売を2026年5月22日より開始いたしました。本製品は、スリックが1987年に開発した独自デザインのグリップ雲台のシステムを継承。よりコンパクトで軽量なスタイルにまとめながらも、4kgの最大搭載質量を実現し

ました。グリップを握ると自在に動かすことができ、手を離すと固定されるため、直感的な構図調整が可能です。カメラの取り付けには汎用性の高い「アルカスイス互換」クイックシューを採用し、L型ブラケットやリグなどの様々な機材にも対応します。また、雲台底部の三脚取り付けネジは、付属のダブルネジアダプターを着脱することでU1/4ネジ（小



ネジ）とU3/8ネジ（大ネジ）の両方に対応。お持ちの様々な三脚に組み合わせてご使用いただけます。水平出しの目安となる水準器も装備しています。

【製品仕様】

全高：130mm、重量：550g、最大搭載質量：4kg、カメラ台サイズ：60×32mm、希望小売価格：28,300円（税別）

【問い合わせ先】

株式会社ケンコー・トキナー
担当：田原 栄一 TEL：03-6840-2970 / FAX：03-6840-2962
製品ページ：https://www.kenko-tokina.co.jp/slik/panheads/grip/af1500ac.html

ヒガサカメラサービス

【新賛助会員入会のご挨拶】

すべての写真表現者に寄り添うキヤノン修理技術認定店

この度、新たに賛助会員として入会いたしました株式会社ヒガサカメラサービスです。弊社は創業から64年、長きに渡りキヤノン製カメラやレンズの修理・メンテナンスを主体として歩んでまいりました。最大の強みは、内部構造を理解し精度を

追求する技術力と、一人ひとりの作家様の要望に寄り添う丁寧な対応力です。現行のデジタル一眼レフやミラーレス一眼はもちろん、メーカーサポートが終了したオールドカメラやクラシックレンズのオーバーホールにも広く対応しています。ご利用いただいた方々からは「諦めていた大切な愛機が別物のように快調に蘇った」「迅速・丁寧な整



備で安心して撮影に出掛けられる」と、多くの信頼と感動の声をいただいております。商業写真の現場から個人の創作活動まで、一瞬の表現に挑む皆様の大変な機材を、最高峰のクオリティでバックアップいたします。機材の点検や精度の微調整など、どんなことでもお気軽にご相談ください。確かな真心と技術で、皆様の多様な写真表現活動を全力で支えます。

【問い合わせ先】

株式会社ヒガサカメラサービス
代表：古橋健吾 電話：06-6626-9449
メール：master@higasacamera.com
HPURL：https://higasacamera.com/

株式会社カシマ

【新賛助会員入会のご挨拶】

株式会社カシマは、「作品の魅力を最大限に引き出すこと」を第一に考え、パネル制作を行っております。豊富な制作実績とノウハウをもとに、作品のサイズや展示環境、ご予算に応じた最適な仕様をご提案を致します。写真展や個展、グループ展をはじめ、学校・公共施設・企業展示など、さまざまな展示空間において、作品と鑑賞者をつなぐ「見せ方」の一端を担うパネルづくりを心

掛けております。また、パネル加工だけでなく、展示施工まで一貫して対応できる体制を整えており、搬入から展示まで安心してお任せ頂けます。軽量性を重視したパネルや高い耐久性を備えたパネル

はじめての展示でも、
プロの空間に。

AND MORE...
詳しい施工の仕様や事例に
サイトをチェック♪

パネル製作 取付・施工

など、用途や展示期間に応じた多様な素材をご用意しております。「作品をいちばん美しく見せるパネルをお届けしたい」という想いを胸に、品質と仕上がりに妥協することなく、一点一点心を込めて制作しております。専任スタッフが制作まで丁寧にサポート致しますので、初めて展示をされる方にも安心してご相談頂けます。

【問い合わせ先】

株式会社カシマ 営業部 担当：加島正和
TEL:03-3971-7961（代表）
E-mail：masakazu@kashima-corp.com
URL：https://kashima-corp.com/

RAID

【新賛助会員入会のご挨拶】

RED Digital Cinema KOMODO-X で高速・高階調・静止画撮影

RED Digital Cinema社は2006年にリリースした4KデジタルシネマカメラRED ONEから1台のカメラで静止画も動画も撮影できることを意味するDSMC(Digital Still Motion Camera)をコンセプトしてきました。KOMODO-Xはその3代目にあたり、DMSC3というカテゴリになります。カメラマウントは

ZマウントタイプとRFマウントタイプの2種類。ロック機能付きの強化されたマウントはグローバルシャッター機能が必要なスポーツ撮影、F1撮影などのプロが必要とする安定性と剛性を備えております。また、高ダイナミックレンジ16.5ストップはシャドー部のディテールとカラーをさらに向上させて、従来撮影できなかった、オーロラ現象のような高階調カラー撮



影などを可能にしました。フレームリミテッド機能に加わり、スチールカメラ感覚での撮影が行えます。主な特徴：
・6K(6144x3420) グローバルシャッターセンサー採用
・ダイナミックレンジ 16.5Stop
・R3D ファイルフォーマット保存
・フレームリミテッド撮影（1静止画撮影）

【問い合わせ先】

株式会社 RAID 板倉
E-mail：info@raid-japan.co.jp
URL：https://www.raid-japan.com

あれから 70 年、「ザ・ファミリー・オブ・マン」写真展 ふたたび

2026 年 8 月 12 日～24 日 日本橋高島屋

「本物の写真に触れる」

文・松本徳彦 (JPS 名誉会員)

ザ・ファミリー・オブ・マンとは

「ザ・ファミリー・オブ・マン」は、1955 年にニューヨーク近代美術館 (MoMA) で誕生した 20 世紀を代表する大規模な写真展です。この展覧会を企画・キュレーションしたのは、当時 MoMA 写真部長を務めていた写真家エドワード・スタイケン (Edward Steichen 1879 -1973) でした。展覧会は世界各地を巡回し、900 万人以上が観覧。日本では 1956 年日本橋高島屋で開催。実行委員会には、日本写真界を切り拓いた写真家・木村伊兵衛をはじめ、展示空間を手がけた建築家・丹下健三など、当時の第一線で活躍する表現者が名を連ねました。その後、国内 20 都市以上を巡回して合わせて約 100 万人の来場者を集めました。日本写真史における金字塔として位置づけられています。

スタイケンは晩年に、「ザ・ファミリー・オブ・マン」を彼の出身国であるルクセンブルクに委ねました。現在、作品群はクレルヴォー城において永久展示され、ユネスコに登録されています。

写真家たちが歴史に刻んだ、世界中の愛と平和への願いが蘇る。

(写真・文：公式ホームページより)



70 年前の 1956 年、今回と同じ高島屋で開催された『ザ・ファミリー・オブ・マン』写真展。当時、大学生だった私は、その写真展の手伝いをするというまたとない機会に恵まれました。

日本の展示構成に合わせて写真パネルを製作するため、山端祥玉氏が経営していたジーチーサン商会で、アメリカから送られてきたネガから写真を引き伸ばし、プリントが作成されました。

私たち学生が担当したのは、仕上がったプリントの「スポッティング作業」です。小さなホコリや傷、白抜けや黒点などを一枚一枚確認し、修正していきました。

日本巡回展の実行委員の一人であった日本大学教授・金丸重嶺氏のもと、渡辺義雄氏らの指導を受けながら作業を進めます。仕上がったプリントは渡辺氏に最終的な確認を受けました。

「これでよからう」と言っていただけでもあれば、「ここここのトーンが違うじゃないか。ちゃんと同じように直しなさい」と指摘されることもありました。一枚一枚に責任を持って仕上げる作業は、学生にとっては緊張感のあるものでした。その一方で、展覧会が形になっていく過程を間近で見たり、展示される前の作品を実際に手に取れたことは、写真を学ぶ上でかけがえのない経験となりました。



展覧会の制作に関わる機会には、そうあるものではありません。だからこそ私は学生時代、機会があればできるだけ積極的に参加しました。たとえ無償であつても、そこから学べることもあるならやってみる。「これはやっておいた方がいい」と思ったことには、迷わず手を挙げる。そうした姿勢は若い頃から大切にしてきたことです。

機会は、逃してしまえば二度と巡ってこないこともあります。まして、本物に触れられる機会はそう何度もあるものではありません。

「ザ・ファミリー・オブ・マン」の制作に関わった経験は、私にとって写真そのものを学ぶだけではなく、「本物に触れること」の大切さを教えてくれました。

若い写真家の皆さんにも、ぜひ本物の写真を直に見て、その写真が持つ力を感じてほしいと思います。コピーされた写真では分からないものが、実際のプリントにはあります。

あのとき本物の写真に触れた経験は、今も私の写真との向き合い方の原点になっています。そして今回、70 年ぶりに『ザ・ファミリー・オブ・マン』を観て、写真そのものが持つ力は時を経ても変わらないのだと、改めて感じました。

(文中の写真は写真展会場での筆者、撮影／松本由利)



JPS 2026 年新入会員展

「私の仕事」

東京：アイデムフォトギャラリー「シリウス」
2026年7月16日(木)～7月22日(水)
大阪：富士フィルムフォトサロン 大阪
2026年8月21日(金)～8月27日(木)



座標上の亡霊たち



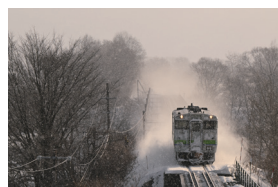
石井 達也 (京都府)



静寂の時



伊藤 彰 (大阪府)



凍てつく鉄路
一根室本線一



衣斐 隆 (神奈川県)



寝息が聞こえる



小倉 美幸 (神奈川県)



As-Salaam



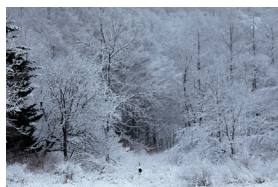
オササギツミ (埼玉県)



切断ヴィーナス
“動”



越智 貴雄 (東京都)



異界への門



落合 強志 (神奈川県)



美人三姉妹、今日も最強



河原 俊幸 (兵庫県)



羅針盤



北村 史成 (北海道)



ふだん着の笑顔で



下司智津恵 (東京都)



エリグロアジサシ



小島 征彦 (埼玉県)



諦める理由を、心が拒んで



坂 祐次 (東京都)

「キノリの家」 アトリエ
ハコ建築設計事務所
澤崎 信孝 (東京都)

貯食



茂 忠信 (北海道)



Dance in the air



柴田 祐希 (愛知県)



逆風 (ぎゃくふう) の誓い



杉谷 昌彦 (大阪府)



働く、(いきてく) 01



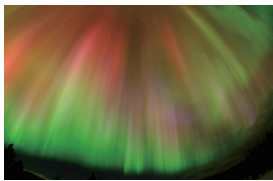
高坂 浩司 (愛知県)



天地水明



高田 保 (広島県)



空に広がるオーロラ



武田 康男 (千葉県)



給水



田中 秀具 (滋賀県)



静寂を聴く



辻田 新也 (滋賀県)



「夢幻」



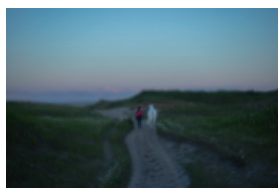
中津原 勇気 (東京都)



横浜市資源循環局鶴見工場



西澤 丞 (群馬県)



彼方



長谷川 健太郎 (東京都)



息吹



藤原 千鶴 (東京都)



Alive in the Zoo 2005

神戸市立王子動物園 #33



舞山 秀一 (東京都)



Colorful



松田 雄亮 (兵庫県)



Éclat Intérieur



間野 真由美 (神奈川県)



黙唱



MiChiCO (東京都)



La Descente



目崎 之教 (和歌山県)



凜



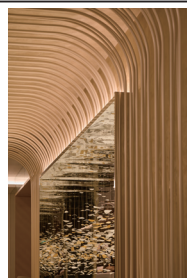
安田 格 (京都府)



独立を迎えた雄虎



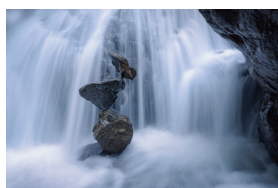
山田 耕熙 (東京都)



OMIYA SKY & SQUARE
THE TOWER



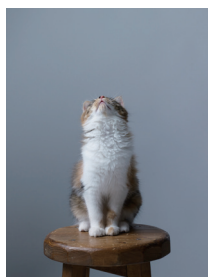
山本 慶太 (東京都)



竜の落とし子



吉田 寛 (東京都)



CAT



芳本 忠士 (滋賀県)

JPS 2026 年 新入会員展 実行委員会：
坂 祐次／小倉美幸／下司智津恵／松田
雄亮／間野真由美／吉田 寛／芳本忠士

※ 展示作品各自2点から編集部でセレクトした1点を50音順に掲載しました。
(構成：小池良幸)

※こちらのQR
コードから、新
入会員のメッセ
ージをご覧ください
だけです。



東京展 記念写真

撮影：吉岡一紀



東京展 会場入り口

撮影：坂 祐次



東京展 会場風景

撮影：坂 祐次



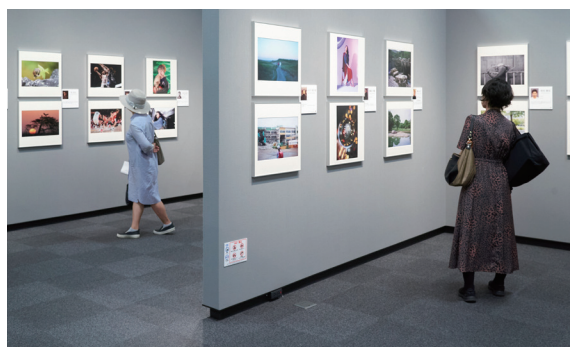
東京展 会場風景

撮影：坂 祐次



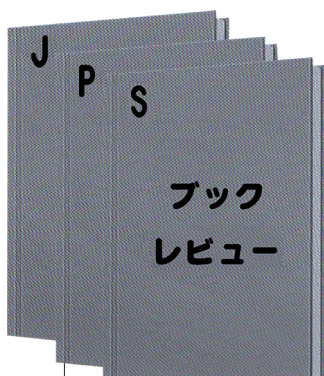
大阪展 会場風景

撮影：芳本忠士

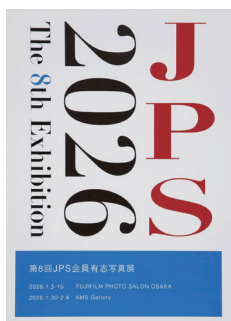


大阪展 会場風景

撮影：芳本忠士



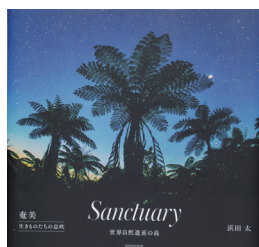
協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。
(2026年2月～8月)
①発行所 ②発行年月
③サイズ (タテ×ヨコ)、頁数
④定価 ⑤寄贈者
⑥電子書籍ストア



第8回 JPS 会員有志写真展 作品集

JPS 会員 87 名

①実行委員会 ②2026 年 1 月
③ 29.7 × 21cm、105 頁
④ 2,000 円 ⑤小笠原敏孝氏



Sanctuary 奄美生きものたちの息吹

浜田 太

①小学館 ②2025 年 12 月
③ 24.6 × 26.3cm、120 頁
④ 4,300 円 ⑤浜田氏



一松永安左エ門生誕 150 年—美しき巨人

杉山吉良

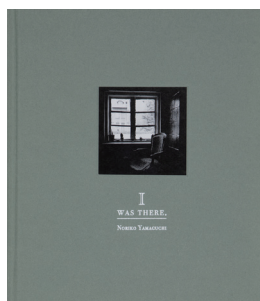
①JCII フォトサロン ②2026 年 3 月 ③ 24 × 25cm、31 頁
④ 1,500 円 ⑤発行所



淡海光彩

田口郁明

①大垣書店 ②2026 年 2 月
③ 19.6 × 22.5cm、96 頁
④ 2,500 円 ⑤田口氏



I WAS THERE.

山口規子

① MONO GRAPHY
②2023 年 11 月 ③ 22.5 × 19.5cm、84 頁 ④ 3,600 円 ⑤山口氏



水俣からあなたへ 9 人の写真家が見つめた水俣病の 70 年 水俣・写真家の眼

芥川仁、桑原史成

①リトルモア ②2026 年 4 月
③ 21 × 14.8cm、128 頁
④ 2,400 円 ⑤芥川氏



あすへの記憶

大石芳野

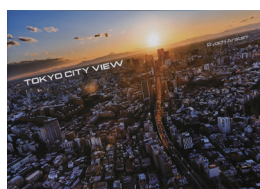
①日経 B P マーケティング
②2026 年 4 月 ③ 12.7 × 18.8cm、264 頁 ④ 2,200 円 ⑤大石氏



ALPACA アルパカ アンデスの民と生きる

松井 章

①アンディーナトラベル
②2026 年 4 月 ③ 23.1 × 20.3cm、72 頁 ④ 4,400 円 ⑤松井氏



TOKYO CITY VIEW

荒谷良一

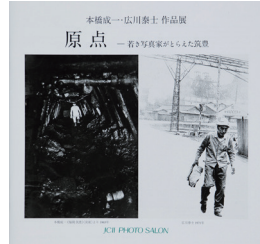
①日本写真企画 ②2026 年 5 月
③ 25.6 × 18.4cm、64 頁
④ 2,970 円 ⑤荒谷氏



EONS

南佐和子

①ウルス・パブリッシング
②2026 年 4 月 ③ 24.5 × 22.6cm、112 頁 ④ 5,500 円 ⑤発行所



「原点—若き写真家がとらえた筑豊」

本橋成一、広川泰士

①JCII フォトサロン ②2026 年 4 月 ③ 24 × 25cm、31 頁
④ 1,500 円 ⑤発行所



2026 年 国府宮 儼追神事 (はだか祭)

撮影・岩月千佳、三浦 誠、
石川裕修

①石川裕修、岩月千佳、三浦
誠 共著・刊②2026 年③21 ×
29.7cm、20 頁④ ⑤石川氏



国府宮 儼追神事 (はだか祭) 別冊 名古屋市西区 2026 年 3 月 1 日(日)

撮影・石川裕修、岩月千佳

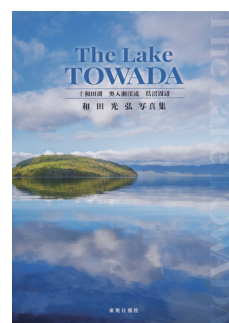
①石川裕修、岩月千佳 共著・
刊②2026 年③21 × 29.7cm、
8 頁④ ⑤石川氏



クレーン船解体新書

写真・出水伯明、文・田中敦夫

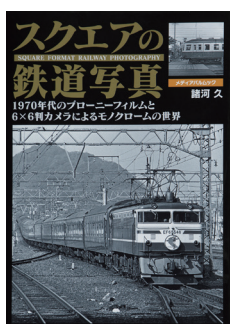
①新泉社 ②2026 年 4 月
③15 × 21cm、144 頁
④2,000 円 ⑤出水氏



The Lake TOWADA 和田光弘写真集 十和田湖 奥入瀬溪流 葛沼周辺

和田光弘

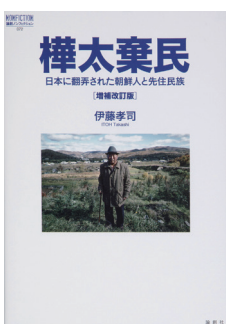
①東奥日報社 ②2026 年 7 月
③21 × 29.7cm、108 頁
④2,200 円 ⑤和田氏



スクエアの鉄道写真

諸河 久

①メディアパル ②2026 年 7 月
③18.2 × 25.7cm、224 頁
④3,600 円 ⑤諸河氏



樺太棄民

伊藤孝司

①論創社 ②2026 年 8 月
③15 × 21cm、276 頁 ④3,200
円 ⑤伊藤氏



列車で行こう! 日本縦断絶景列車の旅

櫻井 寛

①世界文化社 ②2026 年 8 月
③18.2 × 25.7cm、384 頁
④3,600 円 ⑤発行所



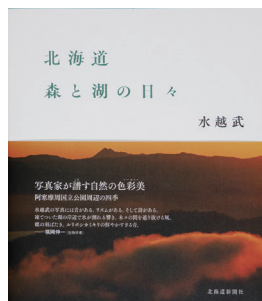
生まれた時が死の始まり

大西成明

①クレヴィス ②2026 年 7 月
③18.2 × 25.7cm、264 頁
④3,960 円 ⑤大西氏

奇 贈 図 書

JCII フォトサロン様 井桜直美 盛岡の収集家・村田明コレクション Part I
..... 前野寛幸 伊勢・志摩 安乗の人形芝居 1971 ~ 1984
..... 岩目田幸平 「部屋／女たちの下町」
..... JTB 旧蔵ストックフォトから見る日本「示威と宣揚 戦中の国策写真 2」
..... 井桜直美 盛岡の収集家・村田明コレクション Part II
小学館様 山本皓一 尖閣「命を救う島」
東京写真記者協会様 第 66 回 2025 年報道写真展記念写真集
集英社様 中村 昇「染谷有香 ヌード写真集『赤いアルバム 2015-2025』」
ダイコロ様 希望の国 ベトナム Part1・Part2
ふげん社様 伊藤時男 FRAGMENT
..... 元田敏三 SHORT HOPE
..... 中野泰輔 Spin around the Night Consumed by the Fire
ぶどうばん社様 齋藤勝元 黒川能 仙境
双葉社様 新・駅弁ひとり旅
キャノンマーケティングジャパン様 第 3 回 GRAPHGATE
東京都写真美術館様 W. ユージン・スミス W. ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代
..... 出光真子 "おんなのざくひん—ある映像作家の自伝"
公益財団法人ギャラリーエークウッド様 ノエミ・レーモンドの建築と意匠—和で紡ぐモダンライフ—
日本大学芸術学部写真学科様 LOCUS 2026 軌跡
日本リアリズム写真集団様 2026 年「視点」第 51 回展作品集
日本肖像写真家協会様 人像 2025



北海道 森と湖の日々

水越 武

①北海道新聞社 ②2026 年 8 月
③21 × 18.2cm、160 頁
④3,250 円 ⑤発行所

受賞（章）おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。



■「第 50 回（2025 年度）伊奈信男賞」受賞 2026 年 2 月 25 日

受賞者：小林紀晴（2003 年入会）

作品「Cyber Modernity – Shanghai, Chongqing, Bangkok, Ho Chi Minh –」に対して。



■「写真著作権功労賞」受賞 2026 年 4 月 24 日

受賞者：松本徳彦（1962 年入会、名誉会員）

長年にわたり写真著作権の確立と写真作品の保存のために多大な貢献をされたことに対して。



■「黄綬褒章」受章 2026 年 5 月 20 日

受章者：宮本博文（2016 年入会）

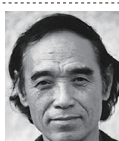
「農業、商業、工業等の業務に精励し、他の模範となるような技術や事績を有する方」に対して。



■「1839AWRDS フォトジャーナリズム部門・プロフェッショナル金賞」受賞 2026 年 6 月 10 日

受賞者：高橋智史（2022 年入会）

作品「カンボジア避難民キャンプでの老女の死」に対して。



■「第 76 回熊日賞」受賞 2026 年 7 月 2 日

受賞者：桑原史成（1963 年入会、名誉会員）

水俣病を 60 年以上にわたり撮影し、その被害を社会に訴え続けてきたことが認められたことに対して。



■「第 20 回後藤新平賞」受賞 2026 年 7 月 18 日

受賞者：大石芳野（1972 年入会、名誉会員）

海外・国内各地で戦争や災害の被害を受けた人びとの思いや生きる姿を、「戦争は終わっても終わらない」という信念に基づいて、半世紀にわたり撮影し続けてきたことに対して。



■「第 42 回写真の町東川賞特別作家賞」受賞 2026 年 8 月 1 日

受賞者：中西敏貴（2020 年入会）

写真集『オプタテシケ』、『Land of Fusion 地と記憶』、『Where We Come From and Where We Might Go』の北海道三部作と同作に関連した一連の写真展に対して。

2026（令和8）年度第27回 公益社団法人日本写真家協会定時会員総会報告

日時：2026年6月5日（金）14:30～16:30

場所：東京都写真美術館 1F ホール

議決権のある正会員総数：1,125名（定足数563名）

出席正会員数：720名（内訳：本人出席98名、代理

委任0名、議決権行使書622名）

その他の出席者：外部理事5名、外部監事2名、名

誉会員3名、賛助会員15社22名

議決事項

第1号議案：2025（令和7）年度事業報告書及び
決算報告書承認の件

第2号議案：名誉会員推挙承認の件

報告事項

- 1：2026（令和8）年度事業計画書の件
- 2：2026（令和8）年度予算書の件
- 3：第52回『日本写真家協会賞』の件
- 4：その他



定刻、総会の開会に先立ち司会進行の伏見行介専務理事から2025年度の物故会員13名、名誉会員2名が読み上げられ冥福を捧げた。続いて2026年度の新入会員35名、総会出席の会員理事、外部理事、監事、名誉会員の方々を紹介した。

熊切大輔会長より「本日はお忙しいところJPS総会にご出席いただきありがとうございます。東京都写真美術館で開催中のJPS展が本日最終日となり、期間中多くの方にご覧いただきました。不安定化した社会情勢のなか様々なものが高騰し経費が多くかかり、会員の減少、寄付金の減少などもあり、厳しい状況となっております。未来のために今行動を起こさなければJPSや写真業界に未来はないと考え、今後も活動を持続するためにも建設的な総会にしたいと思います。ご理解とご協力をお願いいたします」と挨拶があった。

伏見専務理事から「本日の出席正会員は720名で定足数を満たしており、本定時会員総会が有効成立していると報告があり、定款により議長に熊切会長を選出、開会宣言をした。次に議事録署名人を出席者の正会員のなかから宮沢あきら、吉岡一紀両会員に依頼。書記を小野吉彦、記録撮影を桃井一至両会員にお願いし、議案の審議に入った。

【議決事項】

第1号議案：山口規子副会長から「2025（令和7）年度事業報告」が総括的にあった。

続いて、議長の指名により伏見行介専務理事が「2025（令和7）年度決算報告」について、財務諸表（貸借対照表、損益計算書〔正味財産増減計算書〕等をもとに説明し、会員数減少による会費収入減などによる赤字決算であると報告があった。その後、監査報告について公認会計士の中村元彦監事から報告があり、監査意見として問題ないことが説明された。

質疑応答では、会員減少による会費収入減少の対策、名取洋之助賞の終了の件、ノンフィクション写真賞の名称についての件について等があり、それぞれ担当の理事が回答をした。また、著作権について今年4月からスタートしている未管理著作物裁定制度について適切な対応が必要ではないかとの意見があり、貴重な意見に感謝する旨のコメントがあった。第1号議案について承認を諮ったところ、賛成絶対多数により承認可決された。

第2号議案：山口規子副会長が「定款」第6条及び「細則」第9条により「わが国の写真界に顕著な功績のあった写真家」の理由によって、桜井秀正会員を名誉会員に推挙する旨の説明があった。続いて承認を諮ったところ異議無く、賛成絶対多数により承認可決された。

【報告事項】

続いて報告事項にはいり、熊切会長から「2026（令和8）年度事業計画書、予算書を記載した承認につき、定款第35条に基づき、3月2日の第66回理事会で承認し、内閣府に提出した」と報告があった。

報告事項1：山口副会長より2026（令和8）年度事業計画書の説明があった。

報告事項2：伏見専務理事より2026（令和8）年度予算書の説明があった。

報告事項3：伏見専務理事より、第52回「日本写真家協会賞」について、全日本写真連盟に贈ることを、2026年4月20日の第67回理事会で承認した旨の報告を行った。贈呈理由：全日本写真連盟は、1926年（大正15年）に創設された写真愛好家の団体で、朝日新聞社が後援する全国的な組織である。会員は全国で約1万人以上。国際写真サロン、全日本写真展、日本の自然写真コンテストなどの大規模写真コンテストや、各地域に根差した写真教室や撮影会を展開してきた。100周年という長きにわたり、全国の写真愛好家をつなぎ、我が国の写真文化貢献してきたことに対して。

報告事項4：その他の報告事項について伏見専務理事より説明があった。

報告事項の質疑応答では、数名の会員から質問があり、担当理事がそれぞれ回答をした。

熊切会長が議長として議事終了の辞を述べ、2026年度の定時会員総会を閉会した。

（記／書記・小野吉彦、撮影／桃井一至）

Message Board



◆大岩友理 (2010 年入会)

2025 年 3 月の東京・両国ピクトリコショップ&ギャラリーから始まった写真展「KISO HORSE めぐりあい」は、最終巡回として 2026 年 4 月 25 日～5 月 6 日木曽馬の故郷・長野県木曽町で開催し無事終了しました。県内外から多くの方にご来場いただき、日本在来馬の歴史と魅力を知っていただく機会となりました。会期後は展示パネル 50 点を木曽町開田支所へ寄贈。今後は地域で新たな役割を担い生かされていくこととなりました。(愛知県名古屋市中区在住)



◆飯田裕子 (2000 年入会)

私がライフワークとして見つめ続けてきたオセアニアの文化と海。その世界観を反映した海辺の民泊「LittleMoana」を千葉県館山市に開業いたしました。見物海岸まで徒歩 1 分。サンセット、海の向こうの富士山眺望のロケーションです。2 名様ご利用の小さなログハウスですが、撮影スタジオ、ロケベース、リトリートにご活用頂けましたら幸いです。JPS 会員の方にはおすすめポイントをお伝えできます。メールにてお問い合わせください。予約はこちらのサイトより。愛犬との宿泊可。https://www.booking.com/Share-YGhkwp (千葉県勝浦市在住)

◆田口郁明 (1998 年入会)

今年の 2 月に念願のびわ湖の写真集『淡海光彩』を上梓しました。同時に写真展「淡海光彩 III」をオリンパスギャラリー II で、4 月に滋賀県守山市図書館で開催、多くの方々に見ていただきました。びわ湖の写真展はこれまで、2 度オリンパスギャラリーで開催しました。2 度目のときに、写真集を考えた時期がありました。あれから 15 年経ち今、振り返るとこれでよかったと思います。びわ湖は、湖面と山の調和、光と色彩そして、原風景をテーマに作りました。



した。その思いを少しでも写真集から感じていただければ幸いです。今後は、琵琶湖の撮影を継続しながら、「近江中山道から木曽路へ」を取材していくつもりです。(滋賀県大津市在住)

◆瀧本 顕 (2025 年入会)

デジタルネイティブ世代にとって、インターネット上での発表は不可欠である。一方で、画面比率や閲覧環境、表現の形式までもが、誰かに用意された「枠」の中にある。発表する媒体そのものを自由にすることが、私が個展を開く理由のひとつだ。額装を外し、木材へ写真をプリントすることも、その枠へのアンチテーゼである。本展の主題は、失われていく文明と文化。現代から姿を消しつつある「床の間」を想起させる展示や、室内を入口とその対面から見ることで生まれる異なる景色を通して、空間と時間の連なりを表現する。「水平線は、地続き。」という言葉のもと、過去と現在、写真と物質をつなぎ、失われたものの痕跡を空間として立ち上げる。(東京都武蔵野市在住)



◆松井 章 (2023 年入会)

南米アンデス山脈に通い始めて 30 年。名峰の撮影で標高 5,000m 近い高原を訪れるたび、アルパカやリャマに出会ってきた。そして、インカ文明より遙か昔から人と暮らし、文化や信仰にも深く根差してきたことを知った。アルパカは、アンデス文化の中心にいるのではないだろうか。興味が深まるにつれ、やがて放牧家族の家を訪ね、寝食をともにしながら撮影を重ねるようになった。今年 4 月、写真展の開催に合わせて写真集『アルパカアンデスの民と生きる』を刊行。可愛らしくも逞しい姿に加え、放牧や毛刈り、人々との暮らし、壮大なアンデスの風景を収めた。放牧文化の存続が危ぶまれる今、本書がその営みを未来へ伝える記録の一つにな



ればと思う。(東京都中央区在住)

◆櫻井 寛 (1992 年入会)

『列車で行こう！日本縦断絶景列車の旅』(総頁数 384 頁)を上梓しました。本書には日本全国各地 117 の絶景鉄道を収録しています。私はこれまでに世界 95 か国の鉄道を撮影してきましたが、日本の風景の美しさ、鉄道の快適さは世界でもトップクラスでしょう。国土面積こそ 61 位とさほど広くはありませんが、島国なので美しい海に囲まれ、内陸には百名山が聳えています。春夏秋冬の四季があり、季節によって色彩が変わることも見逃せません。加えて北は北海道から南は九州まで津々浦々に魅力的な鉄道が 2 万キロ以上も走っています。本書にはさらに、日本の食文化であり、私の好物でもある「駅弁」も収録しております。「絶景列車」と「駅弁」の旅をお楽しみいただけましたら幸いです。(東京都稲城市在住)



◆荒谷良一 (2000 年入会)

写真集『TOKYO CITY VIEW』を今年 5 月に刊行いたしました。10 年以上、1,500 回以上通い撮り続けてきた、六本木ヒルズ展望台「東京シティビュー」からの写真で構成した写真集です。気象現象や都市のシンボル、太陽、月、富士山などを、私たちが生きる世界の大切な存在としてとらえ、写真と共に解説を加えました。太古の昔から続く時間の中、境のない空の下で私たちはともに生きている。そのことを感じていただきたいという思いからです。世界は変化し続けています。異常気象や戦争など、さまざまな出来事が起きる一方、ここでは国境を越え、同じ景色を見て感動する人々の姿に出会えます。「なんて素晴らしい世界なんだ！」と叫びたい、そんな思いを込めました。(東京都品川区在住)



2026 年 JPS アワード

第 1 回「JPS 写真家賞」決定!!

受賞者 ハービー・山口

公益社団法人日本写真家協会は、2026 年に「JPS 写真家賞」創設した。この賞は、「笹本恒子写真賞」(2017～2025 年)から名称変更した賞となる。「時代を捉える鋭い眼差しとヒューマニズムに裏打ちされた作品世界」という笹本氏の精神を継承しつつ、優れた写真表現を制作する作家を広く顕彰するために設けられた。今回の選考委員は熊切大輔 (JPS 会長)、宇井眞紀子 (写真家・第 1 回笹本恒子写真賞受賞者・JPS 会員)、白山眞理 (写真評論家)。授賞式: 2026 年 12 月 9 日 (水) アルカディア市ヶ谷 受賞記念写真展: 2026 年 12 月 17 日 (木)～23 日 (水) アイデムフォトギャラリー「シリウス」

【受賞理由】

一貫して「人間の希望」をテーマに作品を撮り続け、「人を幸せにする写真」を発表。さらに日本写真芸術専門学校で校長を務めて後進の指導にあたるなど、常に写真の魅力を発信し続けている姿勢に対して。

【受賞の言葉】

この度は名誉ある賞の第 1 回目に選んで頂き、その名誉の大きさに身が引き締まる思いです。私は生後間もなく結核性の「腰椎カリエス」という病気に罹患し少年期を過ごしました。十代の終わりに医師から、将来は平常な生活が出来ますと告げられた時、写真部に所属していた私は、写真のテーマを「生きる希望」に決めました。ほぼ同時期、近所の友人たちのバンドに参加した時、ハービー



ーというニックネームが付いたことで、ハービー・山口という新しい人間になって、病気によるネガティブな思い出を払拭し、夢を抱いて生きていこうと願い現在に至ります。この受賞を機に、写真へのさらなる努力を続けたいと気持ちを新たにしております。ありがとうございました。



新しい朝



未来への期待と戸惑い

東京、2025



マスク越しのキス



地下鉄のジョー

ロンドン、1981

ハービー・山口 (はーびー・やまぐち)

1950 年生まれ、東京都出身。中学 2 年生で写真部に入る。1973 年にロンドンに渡り 10 年間に過ごす。一時期、劇団に所属し役者をする一方、パンクロックやニューウェーブのムーブメントに遭遇し、撮影された生きたロンドンの写真が高く評価された。帰国後も国内アーティストとのコラボレーションをしながら、常に市井の人々にカメラを向け続けている。2011 年度日本写真協会賞作家賞受賞。日本写真芸術専門学校校長。公益社団法人日本写真家協会会員。主な写真展: 「1970 年、二十歳の憧憬」キヤノンギャラリー S 2010 年、「HIKARICAL SPACE 雲の上はいつも青空」滋賀県立美術館 2013 年、「未来への世界地図」小海町高原美術館 2019 年、「時間(とき)のアトラス」ライカギャラリー京都 2019 年、「HOPE2026 シャッターを切った時、幸せだった」フジフィルムスクエア 2026 年。

【選評】宇井眞紀子

ハービー・山口氏は、幼い頃に腰椎カリエスを患った。それが治癒した 10 代の終盤、初めて「生きる希望」を感じ、それを写真のテーマにしようとした。ほぼ同時期に参加していたバンド内でハービーというニックネームが付き、ハービー・山口と名乗ることで新しい自分になり、写真の道で生きていこうと決意した。大学卒業後に渡英。そのま 9 年間過ごした。その間、劇団員として数々の舞台に立つなど様々な経験をかき集め、写真家としての人生を歩んだようだ。作家の人間性が作品に表れると言われることはよくあるが、辛い病気の体験から希望を見つけた人生がその作品を形作っているように思う。

ハービー・山口氏の写真には、人々を笑顔にする力がある。昨今無表情のポートレートの方が被写体の内面を表現できるという考えのもと「笑わないでください」とお願いする撮影方法をよく目にするようになったが、ハービー・山口氏が捉えた被写体は作りものではない自然な笑顔を向けている。方法論ではなく、被写体に向き合う姿勢がそうさせるのではないだろうか。

希望を感じさせる作品群は、今もなお戦争が止まない世界で、人と人をつなぎ生きることを応援するものだ。

【選評】白山眞理

10 代で写真家を目指したハービー・山口氏は渡英後にさらにその情熱を燃やし、1981 年のある日、ロンドンの地下鉄で一世を風靡するパンクバンドのスターに出会った。何枚か撮ってお礼を述べると、「撮りたいものを撮るんだ。それがパンクだ」と告げられた。インスパイアされた彼は、内外のミュージシャンや俳優、一般の人々と向き合い、ポートレートに内面の美しさやしなやかな強さなどを表現して、写真家としての評価を確立した。

代表作『代官山 17 番地』(1998 年)では解体直前の同潤会アパートの日々と良き未来を願う若者たちの姿を、また、東日本大震災後の東北を巡ってまとめた『HOPE 311 陽、また昇る』(2012 年)では、未曾有の困難に対して笑顔で向き合う不屈の人々を写しだした。嘆きや憤りよりも滲み出る優しさや静かな決意に目を向けるのが彼の表現であり、人生観の現れといえよう。その作品には明日への希望や励ましがこめられており、不安や閉塞感を感じやすい若者たちからの支持も大きい。

長年に亘ってこうしたスタイルを貫くハービー・山口氏の姿勢は他の追随を許さぬものだ。今回の受賞を機に、そのポジティブなメッセージをより多くの方々と共有できるようになれば幸いである。

2026 年 JPS アワード

2026 年第 1 回「JPS ノンフィクション写真賞」決定！

公益社団法人日本写真家協会は、新進写真家の発掘と活動を奨励するために、30 歳までの写真家を対象とした「JPS ノンフィクション写真賞」の第 1 回審査会を熊切大輔（写真家・JPS 会長）、小松由佳（写真家）、鳥原学（写真評論家）の三氏によって行いました。応募された 15 歳から 30 歳までの 39 名 40 作品を厳正に審査し、最終協議の結果「JPS ノンフィクション写真賞」は李啓睿「北風が、記憶を揺らす」、「JPS ノンフィクション写真賞奨励賞」にはフジヤマヨシヒサ「ガチョウとニシン」の受賞が決まりました。



審査風景 写真左から鳥原学、熊切大輔、小松由佳の各氏
撮影／企画委員会委員：藤井智弘

○最終選考候補者

- ・岩見芽依「たった 10 年の都市の話」
- ・小泉志穂「あの日の温もり」
- ・高橋侑也「聖俗私観」
- ・フジヤマヨシヒサ「ガチョウとニシン」
- ・李 啓睿「北風が、記憶を揺らす」

■第 1 回「JPS ノンフィクション写真賞」受賞

「北風が、記憶を揺らす」（カラー 30 点） 李 啓睿（り・ちいれい）



プロフィール 1997 年、中国生まれ。2023 年、九州産業大学大学院芸術研究科修士課程修了。現在、博士後期課程に在籍し福岡を拠点に写真制作を行っている。2021 年 6 月、福岡アジア美術館グループ展参加作品 [志賀島の日常] 6 枚の写真を出展。2022 年 9 月、ソニーイメージングギャラリー銀座グループ展参加作品 [繁華の果て] 10 枚の写真を出展。2023 年 6 月、福岡市美術館グループ展参加作品 [繁華の果て] 10 枚の写真を出展。2024 年、「limelight2024」Under30 部門次点。2024 年、日本写真芸術学会誌〈創作編〉掲載・入選

作品について 「九台」は、祖母の死をきっかけに私の記憶の中で止まっていた場所だった。17 年ぶりに訪れると、懐かしさよりも、自分がそこに属していない違和感を覚えた。発展と停滞、高齢化する家族の姿が重なる風景には、地方社会の変化と流れた時間が刻まれていた。私は写真を通して記憶を取り戻すのではなく、失われたまま残るものや、距離を感じながらも存在する家族の姿に向き合おうとした。撮影中に吹く北風は、遠ざかっていた記憶を静かに蘇らせた。

受賞者のことば

このたびは、第 1 回 JPS ノンフィクション写真賞の本賞に選んでいただき、大変光栄に思います。本作は、17 年ぶりに訪れた父の故郷・九台で、家族と土地の変化、そして自分の記憶との距離を見つめながら撮影したものです。撮影を受け入れてくれた家族に感謝するとともに、今回の受賞を励みに、目の前の風景や人々の中に積み重なる時間を丁寧にみつめ、これからも写真を通して向き合い続けたいと思います。

■第 1 回「JPS ノンフィクション写真賞奨励賞」受賞

「ガチョウとニシン」（カラー 30 点） フジヤマヨシヒサ（ふじやま・よしひさ）



プロフィール 2020 年、日本写真芸術専門学校卒業。2020 年から photogroup amm に所属し、展示会にて作品を発表。2020 年「mezzosoprano」(upstairs gallery) グループ展。2022 年、「白い縫い目」(DESIGN FESTA GALLERY) グループ展。2025 年、「2M」「ガチョウとニシン」「出力」(コマギャラリー)。

作品について 人工花や展示物など、現実を理解しやすい形に置き換えられたものを撮影している。私は、色褪せや歪み、補修の跡など、時間や人の手によって現れる「本物でも偽物でもない」部分に惹かれる。写真も人も、見えている情報だけではすべてを捉えきれない。だからこそ、何を残し、何を削るかを考え、見る人がその外側を想像できる余白をつくりたい。限られ情報から生まれる認識のずれや想像が、現実とは異なる豊かな世界を生み出すと考えている。

受賞者のことば

この度は第 1 回 JPS ノンフィクション写真賞奨励賞をいただき、大変光栄に思います。私は、人工花や模型、展示物など、人が世界を分かりやすい形に置き換えたものに惹かれて撮影してきました。目の前にあるものを見ながら、その奥にあるものを想像することが、私にとって写真を撮る面白さの一つです。今回の受賞を励みに、これからも身近な世界を眺めながら、自分が面白いと思うものを写真に残していきたいと思っています。

2026年第1回「JPS ノンフィクション写真賞」総評

熊切大輔 (写真家・公益社団法人日本写真家協会 会長)

ノンフィクション写真賞は新しいコンテストということで幅広いテーマや表現の多様な作品が多く集まったと思う。個性があふれる作品たちに、我々審査員も大いに頭を悩ませる、まさに嬉しい悲鳴があがった審査となった。

そんな中、映えあるノンフィクション写真賞には李啓睿さん「北風が、記憶を揺らす」が選ばれた。故郷中国の出身地である小さな町でおきた撮影者の記憶の数々。それをなぞるように淡々と、そしてそのなんとも言えない空気感を捉え、表現した作品は見るものの心にじわりと浸透してきた。たんなる「自分探し」ではない親と子、そして世代や時代を網羅した社会そのものを写し出しているように感じられた。そして奨励賞にはフジヤマヨシヒサさんの作品「ガチョウとニシン」が選ばれた。写真賞作品とは全く異なったアプローチの表現は、このノンフィクション写真賞の幅の広さ故と言ってもよいだろう。抽象的な絵柄は日常にちらばる、こちらが意識しなくても強制的に飛び込んでくるような、情報量の洪水を具現化したように感じられた。見るものの想像力に挑戦するような、刺激的な表現とも言えるだろう。

両作のみならず応募されたすべての作品に新たな可能性と未来を感じる事ができたように思う。



小松由佳 (写真家)

私たちはどんな時代に生き、どんな世界に身を置いているのだろうか。「私である」とはどういうことなのか。そうした問いを一連の写真によって表現するとき、個人の視点の違いが鮮明に現れる。名称やコンセプトを一新し、対象年齢を30歳以下に改めた第一回だが、独創性あふれる作品が集まった。世界を見る目はこんなにも自由なのだと唸らされる。

ノンフィクション写真賞に決定した「北風が、記憶を揺らす」は、自分という存在とそこに繋がる土地を、撮影者が内側に入り込みながらも俯瞰している点で印



象的だった。風土に人が暮らし、働き、集い、食べる。それらが五感を通して伝わってくるような生々しさがあつた。撮影者の視点に安心して身を委ねられるような感覚を得るのは、被写体との関係や独自の距離感だけでなく、作品の根底に流れる、柔らかな光のような眼差しゆえか。

奨励賞の「ガチョウとニシン」は斬新な切り口で、普段、自分たちを取り巻くものへの揺るぎない問いかけを感じさせられる。流れ去っていく時間のほんの一瞬を、写真として切り取る。私たちはそこに、確かに時代や人間の手触りを感じ、残していくことができる。自由な目で世界を見つめ、写真の可能性を求める意欲作を、次回も楽しみにしている。

鳥原 学 (写真評論家)

40点の瑞々しい作品を見ながら気づいたのは、故郷と呼ぶべき場所に焦点を当てた作品が多いことだ。主に20歳代の応募者たちが、「私は何者か？」という根源的な問いを立てるのは必然的だと思う。ただそのカメラワークの多くに、共通するスタイルへと収束する傾向が見られた。先行する事例を学ぶだけでなく、それを乗り越える意志こそが評価に値する。



受賞作の李啓睿「北風が、記憶を揺らす」にはその意志が強く表れていた。中国からの留学生である作者は、父の親族が暮らす吉林省を17年ぶりに訪れ撮影していた。高度成長に取り残された地方が抱える困難さ、その中で生きる人間の切実さに、しっかりと接近している。写真家としての身体的反応が強い。そこに私は希望を託そうと思った。次作は、作者がいま暮らす足元、この日本を見つめてほしい。

奨励賞のフジヤマヨシヒサ「ガチョウとニシン」はキッチンな色彩と大胆な切り取りで、きわめてポップな印象を与える。かつて「ガリーフォト」と呼ばれたムーブメントを想起させもする。この作法は情報社会のあり方に対して、強く批評的であろうとする態度である。写真の見かけを裏切るように、自律性を目指す姿勢を評価した。

第1回 JPS ノンフィクション写真賞

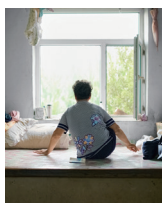
受賞式：2026年12月9日（水）アルカディア市ヶ谷

受賞記念写真展：2027年1月29日（金）～2月4日（木）東京

：2027年2月19日（金）～2月25日（木）大阪

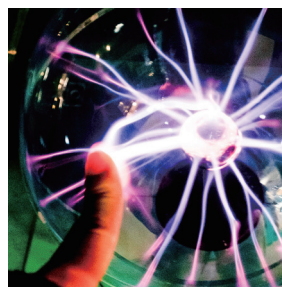
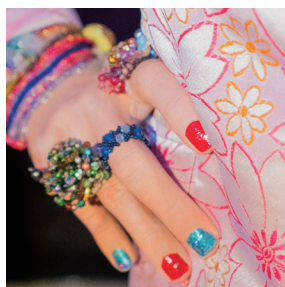
■第1回「JPS ノンフィクション写真賞」

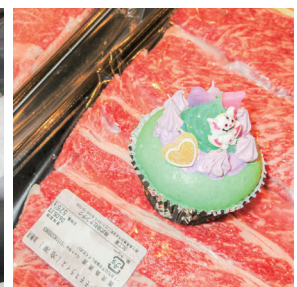
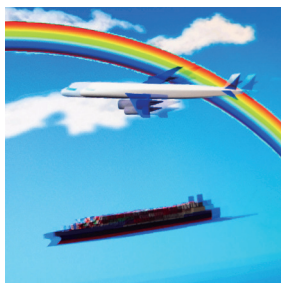
李 啓睿 「北風が、記憶を揺らす」 (カラー 30 枚)



■第1回「JPS ノンフィクション写真賞奨励賞」

フジヤマヨシヒサ 「ガチョウとニシン」 (カラー 30 枚)







都筑 弘雄 名誉会員

2026年2月14日、肺炎のため逝去されました。95歳。(1958年入会)

1930年愛知県生まれ。1949年早稲田大学商学部、早稲田大学写真部へ入部し学生写真界で活躍。早大写真部代表委員となり1952年全日本学生写真連盟を結成。初代委員長に就任。1953年大学卒業後、写真家濱谷浩氏に師事、富士写真フイルム(株)入社。技術、宣伝部門担当を経てプロフェッショナル写真部長、感材部長、国内営業本部副本部長に就任。富士フォトサロン社長。(株)フジカラーサービス取締役などを歴任。引続き同社プロ写真部顧問(フォトディレクター)に就任。日本写真協会常務理事、日本広告写真家協会(APA)監事、日本写真芸術学会等で活躍された。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

都筑弘雄さんを悼む

桑原史成

訃報が飛び込んできた。日本写真家協会名誉会員の都筑弘雄さん。先達の都筑弘雄さんといえば富士フイルムでの重鎮の方である。僕よりも年長者で言わば“雲上の人”であった。

故都筑弘雄さんを語る(述べる)前に、故石井彰一さん(元JPS会員)について記したいことがある。1962年の当時、石井さんは富士フイルムの宣伝部長であった。僕はこの年の秋に銀座の富士フォトサロンで個展「水俣病」を開催した。この展示の企画には石井さんの協力が大きかった。写真展はメディアでひとまず好評だったが、富士フイルムの宣伝課には災いを残すことになった“出来事”がある。

それは、水俣病事件を起こした原因の新日本窒素(現チッソ)の水俣工場で生産される原料のポリエステルまたセルロースなどが富士フイルムに納品され、フイルム

になる企業間のビジネスであった。そこで新日本窒素は日経連を通して、富士フイルムの上層部に強い抗議をしたのである。当時、都築さんは(株)富士フォトサービス(富士フォトサロン)の社長で「桑原史成の“出来事”」は看過出来ない社内問題であったことは言うまでもない。富士フイルム内での対応の経緯は詳しくは知らないが、石井彰一宣伝部長は減俸の処分を受けられた。それは都築さんと何人かの社員に及んでいたようである。

都築さんにはJPSの会合でお会いすることがしばしばあった。親しくなる関係では無かったが、早稲田大学から写真界(富士写真フイルム)に就職されたエリート、という印象を強く持っていた。朝日新聞の全日写連への尽力にも感嘆する。最後に、仮定の話だが、早大からメディア(新聞、出版)の職場での業務を果たし、そしてフリーランスの道を歩まれたら恐らく後世に残す足跡(作品)を築かれた、と強く思う。安らかにお休みください。



BAKU 斉藤 名誉会員

2026年6月18日、急性心不全のため逝去されました。77歳。(1984年入会)

1948年新潟県生まれ。1994年SAアンコール遺跡調査隊に参加して撮影を開始し、カンボジア復興とクメール文化の啓蒙活動をはかる。写真集に『アンコールの神々—BAYON』(小学館、1997)、『BAYON:The Faces of the Towers』(UNESCO出版局、1999)、『アンコールと生きる』(朝日新聞社、2005)など多数。主な写真展に「遺跡・自然と人々—BAKU 斉藤の視線」(カンボジア首相府ピースパレス、2013)、「世界遺産アンコール遺跡辞」(カンボジア・プレアビシア博物館、2018)等。2006年にカンボジア王国友好勲章を受章。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

BAKU 斉藤さんを悼む

桑原史成

BAKU 斉藤(本名:斎藤富士男)さんが逝った。2026年6月18日、干支で僕より一回り若い78歳で帰れぬ天国に行ってしまった。

彼は写真の世界に生きて、コマーシャル・フォトで活躍してきた。僕が彼を知ったのはJPSに入会後で、1980年代に韓国の写真作家協会との交流の折に何人かのJPS会員と首都ソウルを訪れた折に知り合った。

僕たちは彼のことを「BAKUさん」と、呼んで親しんでいた。そのBAKUさんが世界遺産で誰もが知るクメール王朝の遺跡「アンコール・ワット」の撮影に身を投じたのは1995年から、と記憶する。日本政府アンコール遺跡救済チーム(JSA)の一員として写真の記録に深く関わってきたのである。幾度かの撮影を終えて帰国したBAKUさんを囲んで撮影の体験を聞いたことがある。巨大な石

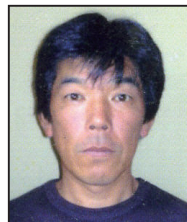
仏の顔を撮影する時、20mから30mの高さにある石仏を、大判カメラ(4×5インチ)をほぼ水平にして撮影するのだと語ってくれた。木材の丸太で組み立てられた足場は、微風でも揺れると嘆いていたのを思い出す。撮影した大小の四面尊顔は二百数十体にのぼる。商業写真の撮影で身につけた大判カメラの操作技術が、アンコール遺跡の撮影・記録に大いに役立ったことは間違いない。

遺跡「アンコール・ワット」に次いでタイの国境に近い遺跡のバンテアイ・チュマルまでも足掛け20年の歳月にわたって奮闘した。2005年に朝日新聞社から刊行された写真集『アンコールと生きる』の撮影後記でBAKUさんは遺跡と写真のことを要約して「…石仏が消滅した時に写真で記録は残る…」と記している。BAKUさんは偉大な足跡を世界の人々に、また未来に遺してくれた、誉高い写真家である。有難う。お休みください。



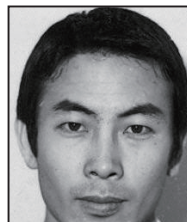
小島 卓 正会員

2025年7月8日、逝去。
83歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(1975年入会)



吉野 俊幸 正会員

2026年1月4日、食道がんのため逝去。72歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(1994年入会)



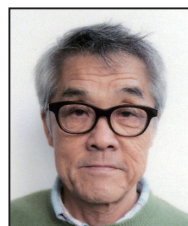
井上 寿美雄 正会員

2026年1月20日、胃がんのため逝去。78歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(1983年入会)



植松 秀之 正会員

2026年1月24日、逝去。
65歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(2003年入会)



渡辺 達生 正会員

2026年3月12日、肺炎のため逝去。77歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(2020年入会)



鈴木 邦弘 正会員

2026年3月14日、肺がんのため逝去。66歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(1996年入会)



前田 憲男 正会員

2026年4月5日、細菌性肺炎のため逝去。79歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(2010年入会)



高井 潔 正会員

2026年5月27日、がんのため逝去。87歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(1971年入会)

プロ写真家による写真グラフ JPSVISIONS 2026年9月30日 創刊

写真の社会的意義が大きく変化する中、公益社団法人日本写真家協会（JPS）では、様々な改革やチャレンジを行っています。その一環として、新たに写真グラフ誌を創刊いたしました。

《創刊 第1号》

特集 「写真はどこへ向かうのか」 — 時代を切り拓き続ける先駆者たち
安珠／佐藤時啓／宮嶋茂樹／浜田 太

A4判 32p／オールカラー／1万4千部印刷／年2回9月・3月の末日発行／
無料配布

《入手可能場所（予定）》

全国の写真ギャラリー、カメラ関連メーカー店舗、量販店などの情報設置棚ほか

発行所：公益社団法人日本写真家協会（JPS） 出版編集委員会



日本写真家協会 Web 会報 第 186 号（年 4 回発行） 2026 年 9 月 30 日 発行 ©編集・発行人 熊切 大輔

URL <https://www.jps.gr.jp/>

Email info@jps.gr.jp

本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

出版編集委員 伏見行介（専務理事）、小池良幸（担当常務理事）、小野吉彦（委員長）、柴田 誠（副委員長）、鹿野貴司、桃井一至、山縣 勉

発行 公益社団法人日本写真家協会（JPS）

〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 番地 JCII ビル 303 電話 03 (3265) 7451（代表） FAX 03 (3265) 7460